藤原源作翁傳

Collection of

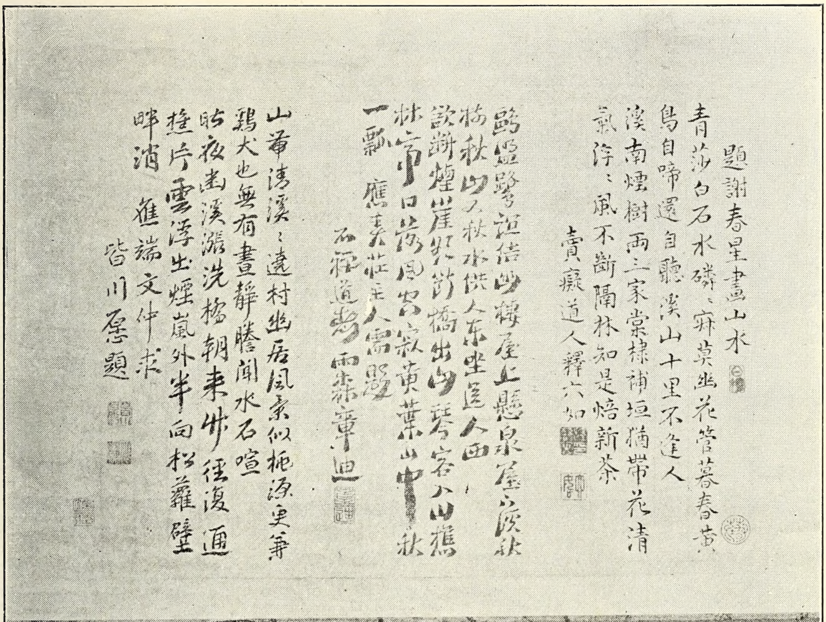
Fujiwara Gensaku.

藤原源作翁傳





石敢翁自畫


題謝春星畫山水
青莎白石水磷〻寂寞幽花管暮春黄
鳥自啼還自聽溪山十里不逢人
溪南煙樹两三家棠棣補垣猶帯花清
氣浮〻風不斷隔林知是焙新茶
賣癡道人釋六如



謝蕪村筆絖地野馬圖（着色）



謝蕪村筆絖地野馬圖（着色）



同　（着色）



同（着色）





松村呉春筆大江山之圖（淡彩）





同（淡彩）


興

業

字

儉

書藤原明

梅[illegible]山人

儉勤持已而一
家寧先公後

私而一國強

題藤原翁傳

京都　陵南

序

誠意正心以修其身齊其家是聖賢誨人之要領而治國平天下亦實基此余深以爲戒未曾一日忘之藤原忠一郎君頃者輯錄亡父源作翁生涯行事書成示之徵序於余余受讀之且詳聽其逸事於是余益知聖人戒吾之切且深也自明治初年以降西洋浮華之風大行人情日澆季國粹漸頹廢奢侈淫靡不知所底止源作翁大慨之挺身爲棉布商計劃慘憺務廉其價思良其質曰聊以寓矯正世道人心之意而已自是聲譽大揚藹藹

雉兎之徒亦爭趨買之終富累鉅萬齡重九十如源作翁豈誠其意正其心而身修家齊者非歟其子忠一郎君亦善繼父志捐資投金救恤是昜育英是勵志士材能賴其庇者自是將漸多則謂源作翁作治國平天下之基亦非溢也此書所貴固不在文字間讀者須默通心識則源作翁勤勉不倦之容貌樸遬不飾之言語髣髴躍出眉睫間若能取以爲龜鑑有所私淑乎其稗益必知不鮮少矣明治辛丑夏八月於鴨涯僑居京都帝國大學法科大學教授岡松參太郎序之

序言

余は藤原源作翁の傳を讀み感ずる所頗る多し今其所感の概略を記し以て序文に代へんとす思ふに翁は信仰の人なり或一種の確乎不抜の信仰を抱き其信仰を以て其生涯を貫き其信仰に因りて其目的を成功せし人也凡そ信仰は殆と凡ての信仰に於て或る廣き意味に於ては宗教的なりされども翁の信仰は翁の自白せし如く來世に於ける精神不滅を信ぜず即ち地獄に往くとも極樂に生るゝを

も信ぜざりしなり佛教若くは基督教に教ふる所の超絶的生活の存在を否定したるなりされども翁の一生孜々として殖產興富子孫の計を成すを觀るときは翁に取りて其來世とも云ふべきものは其血液其思想の幾分を貽せる子孫其物に外ならざるべし即ち宗教に教ふる所の過去現在未來三世の超絶的生活に非ずして父祖自己子孫の現實的歷史的三世の生活の存在のみ翁の眼中に在りしなるべし此點に關して儒教に教ふる所の積善

の家には餘慶あり積不善の家には餘殃ありと謂ふ者と其信仰に於て頗る相似たる所ありと謂ふべし果して然らば翁は精神不滅を信ぜずと謂ふも單に一般宗教の教ふる所と異なるのみにして亦是れ形式を異にしたる或る一種の精神不滅の思想を抱きたるとも觀るべきに非ずや又翁は神佛の如き宗教の客體に對して一般普通の信仰を持したるは事實なり其北野天滿宮に對しても單に古代の賢相に對する尊敬と其國家に於ける功勞

に對する感謝の情のみに止まらざりしならむ其他の一方に於て伏見稲荷に對する熱心の信者たりしに由りても知らるべし此二者に對して多少別樣の信念ありたるにもせよ兎に角に一般普通の人の如く此の如き宗教上の神靈を以て靈驗奇特のものとし自己の運命の支配者其運命の擁護者なりと信じたるに相違なし即ち自己の目的を成功し財産を增殖したるは自己の細心なる經營と嚴肅なる道義の履修に因るにも拘はらず冥々の

裏に自己の運命を支配する幾多の靈性的客體ありて之に投託し之に祈念し其擁護の力に憑りて這般の成功を獲取せりと信じたるに相違なきなりされども一方に此の如き超絶的勢力の存在を認めながら何故に他の一方に先きに述ぶるが如く自己の靈魂不滅を否定して超絶的生活の存在にまで信及せざりしや大體に於て彼我の思想は殆と同一の徑路に屬するものに非ずや

但し翁の道德に對する觀念は頗る健全なり

と謂ふべし宗教の客體に對して其靈驗奇特を信じたるも之を自己運命の支配者擁護者として信じたるのみ之を以て自己の私利私慾を達する器具として自己の非理の要求不正の要求をも或る手段に由りて聽かしめ得べき器具として觀んは甚だ不敬の事たり即ち自己は彼れに支配せらるゝものにして彼れを支配すべきものには非ずと思考したるなるべし世の諺に云ふ所の正直の頭に神宿ると云ふが如き祈らずとても神や護らんと

云ふが如き思想こそ翁の宗敎的客體に對する信仰の中心點なるべけれ是れ其固有の健全なる道德的觀念に由りて這般の信仰を其極めて陷り易き病的狀態より救ひ出したるものと觀るべからざらんや且つ翁の道德的觀念の健全なることは幾多の方面に於て之を認め得べし其維新の際皇室に對し奉りて忠勤を盡しながら或人之れを問へるにも默して言はざりしが如き其他公共に對する慈善的行爲も務めて人の耳

目を避けて其跡の世に顯はれんことを欲せざりしが如き之を要するに善を爲すは善の爲めに之を爲すのみにして名譽利益を得んが爲に或は其之れと伴ふが爲めに爲すに非ずと思考したるものに非ずや彼陰德あれば陽報ありとは一般の人士殊に近代の近江商人の道德を支配したる格言なり翁の道德的觀念も之れに制限せられたる其宗教的信仰も此格言に負ふ所極めて大なるべし此格言の意義は無論陽報は自己より企求すべきも

のに非ずして陰德さへ勉めて行はゞ自然に來るべきもの是れ天地の約束なり即ち是れ天道なりと謂ふに外ならざるべし兎に角に翁の道德的觀念は全然統一的にして且健全なるものと謂ふべし

最後に翁の行實に就きて特書すべきことは其後嗣に遺言して鉅万の金額を奬學資金に寄與し之を斯道の當局者に托し其利銀を以て永遠に專門の學者をして其研究を繼續し大成せしめんが爲めに適當の補助をなさん

と謀りしことと是れなり其事今既に計畫中に在りと聞く此事たるや其結果は直に我邦の學術界に現はるべく影響する所彼區々の慈善的行爲と日を同ふして語るべきに非ず翁自身に取りても其一生を通じて慘澹たる經營に由りて成就したる藤原商社の確立と共に雁行すべき一大企畫なりと思考せしならん設令然かく重要視せざりしにもせよ余は此二者を以て頗る興味ある對比となすに躊躇せざるなり抑も翁の目的たる商社の確立

は露骨に言はゞ富其物を維持するに外ならざるべし富とは何ぞや庫中の死物に非ずして數百千人の手中に展轉流動しつゝある活物なり之を維持するの法其宜を得ざれば永く一家に留まること難し偖學者の思想其物は果して如何其學說の發表にもせよ機器の發明にもせよ數百千年を通じ常に後繼者ありて幾たびか之を改竄し幾たびか之を裁成し世に合し時に應ぜしめて然る後其活用を完し其存在を保つことを得然らずんば廢物

となりて終らんのみ而して翁の這般の企畫は全く兩者の永存を計るものと謂ふべし其商社の確立は翁の信仰より來る物質的一種の永生を企圖するものなり奬學資金の寄與は其富の餘力を以て他の形式と交換し學者の思想に對する後繼者を養成し精神的一種の永生を企圖するものにあらずして何ぞや翁の性行夫れ斯の如し余翁の傳を讀み深く其爲す所に感あり敬服欽慕の情自ら禁ずることを能はず敢て其所感を述ぶ

明治三十四年八月

井上密

序

明治二十五六年の交余始めて藤原源作翁と相識る爾來翁の謦咳に接し併せて翁の家風を目觀耳聞するもの多年因て畧ぼ翁の性行と閲歴とを知悉するもの也之を惟ふに勤儉忍の三德は實に翁が天禀の特性にして翁が貨を殖し業を興せる所以も職として是れ之れに由る亦偉なりと謂ふべし蓋し此三德は之れを大にしては國家之れを小にしては個人の必ず一齊に待つこと多き所にして之れが消

長の一に國家個人の興亡隆替に關することは固より時の古今に跨り國の東西に渉りて而て復た秋毫の差異あるを見ず此れ誠に人人の宜しく獎勵すべき所なるに一二の先輩の士一たび西洋文明の説を呼號し其技術の進歩其工藝の發達を賞揚してより一國の民心擧げて智巧を是れ尚び驕奢に流れ遊宴に耽りて而して特り自ら責めざるのみならず偶ま人の能く勤に能く儉に能く忍び所謂る三德を具へて以て之を實行するものを見れ

ば則ち呼んで吝陋となし指して頑固となし復た爲めに相謀らざるに至る而かも此頽俗の窮極せざる所は今や十分の弊毒朝野を渲染し國帑の空乏して個人の家を傾け產を破るもの續續絕へず慘境すでに斯くの如くにして而して彼の智巧是れ尚ぶの輩迷夢未だ醒めず徒らに彌縫の策を講じて以て一日の安を偷み未だ曾て一人の自ら奮ふて勤儉恐の實行を盟ひ以て時弊を救はんと擬するものあるを見ず之を翁の家道の磐石の如きに

比すれば其優劣奚ぞ翅た天淵の差異のみならんや蓋し翁は本と世の所謂る文明者流の擯斥して吝陋頑固となす所而して今や斯の如く然り彼れ將た何の顔色ありて翁に對せんや翁の德も亦此に至りて彰大著名なりと謂ふべし

翁の三德は其れ斯くの如し然れども余は此外翁に於て更らに崇敬すべき一大特性の存するものあるを認む一大特性とは何ぞや自信力の堅固なること是れ耳今夫れ人あり能

く勤に能く儉に能く恐に身に德性を具へて之れを實行するも自ら信ずること薄ければ唯だ其惘むべきを見るのみ秋毫も其崇敬すべきを見ず之れを惟ふに自信は則ち獨立心の由つて出づる所人にして獨立心なきは則ち己れなき也余嘗て其己れなきものを觀るに其一擧其一動一として外部の刺擊に左右せられざるはなし或は人言に迷惑し或は人意に阿諛し大甚しきは則ち黃白の奴隸となりて遂に自己の貴きを忘却し進んで得るな

く退て失ふ所多く首鼠兩端以て國を誤り以て家を亡すもの擧げて數ふべからず若し夫れ自信あるの人は乃ち然らず挺然として獨立し自ら昂然として獨行し是を是とし非を非とし一に自ら信ずる所を斷行して而して後ち止む亦た古人の所謂る天地を窮め萬世に惑はざるものゝ故に其爲す所大率ね緊要に中り一家も倚りて以て榮へ一國も倚りて以て興る財政學の原則に曰く大藏大臣は否な然らずと答ふるの人ならざるべからずと余深く

翁の此資格を具ふるを信ずる也誠に翁は一家の大藏大臣として既に成功せり之をして一大會社の大藏大臣たらしめば必らずや成功せしならん將た亦翁をして今少しく學問ありて而して之に假すに年を以てせば必ずや一國の大藏大臣として成功せしならん今や我國大藏大臣其人なきに苦む此一に國家が翁の如き性格を具備するの人物を養成するとを怠りたるの結果に屬す翁の美德も亦此に至りて愈よ彰大著明なりと謂ふべし夫れ

然り翁をして時弊を救ふの衝に立つことを得せしめざりしは眞に千秋の遺憾とする所然れども翁の識見の遠大なる固より自個の一代を以て萬事の終局となすものに非ず故に其世に在るに方りては一擧手一投足自ら兒孫の模範となり時に遺訓を垂れて以て人人の當に遵守すべきの道を示せる所以は一に其兒孫をして遺業を紹き遺志を行はしめんと欲してのみ其他一族を分ちて數家となせしが如きも亦其用意の周到なるを知ると

同時に其微意の存する所を窺ふべし余此に於てか翁の兒孫の責任の極めて重且大なることを想ひ切に其夙夜に勉强して以て其家聲を墜さゞらんことを是れ望む藤原源作翁の傳成るに當り聊か鄙見を述へて卷首に題すと云爾

明治三十四年八月

櫻井一久

序

余夙に聞けり藤原源作翁は赤手にして家を興し而も中年以後半身不隨の軀を以て能く巨萬の富を致せりと而して其性行處世の梗概に至りては茫として聞く所あらざりき翁の男忠一郎君と滴水禪師の會下に於て相識るを得るに及んで問ふに翁の性行事業を以てす君之に答へて曰く老爺生來書を讀まず道を聞かず頑然たる一老夫のみ其性行事業に至りては何等語るべきものなしと余敢て

復た間はざりき翁永眠の後五閲月君余に翁の傳一卷を示され始めて翁の生涯を詳悉することを得たり

翁維新の際長門藩主毛利公の知遇を得て其來訪を受け其他長薩兩藩勤王諸士の爲め大に盡す所ありしを以て　王政復古の後　朝廷功を錄し賞を行ふに方り特に書を下し其功を表せしむ翁曰く臣子の分のみ何ぞ言ふに足らんと一言の以て其功に及ぶなかりし」

翁は百有餘萬の富を有し而して汎く世と交

らず齡八十八に至るまで身に絹布を纏はず出でゝ鐵路に搭ず必ず下等車に倚る居室極めて質實に又別邸の莊麗を置かず酒量大なるも終生杯酌を手にせず常に寡默口言ふ能はざるか如く而も心に斷ずる事明晰なりき翁は堀田瑞松を窮乏に救ふて其業を成さしめ井上某を助けて其家運の衰頽を挽回し伏見街道に石敢當を建て天變地妖ある毎に罹災の窮民を救恤し其他公共の事業に私財を抛ちて吝める色なかりし

老聃曰く我に三寶あり慈儉謙と翁は實に三寶を懷にし之を實業界に弄び世上の富貴榮華を視ること浮雲の如く悠々自得以て其天年を全ふせられたるものの歟

當今の世徒手起つて巨萬の富を致す者亦鮮からず而して其富を致す所以は多くは爲政者の庇護に依り奇利を壟斷したるにあらざれば投機の業に因りて偶然の暴富を得たるに過ぎず而も既に其富を得るや放心逸樂大厦高樓の美に誇て以て一生の雄とし綺羅錦

繡紅裙緑酒に醉て以て其豪を衒ふ然り而して細民の疾痛飢餓を視ること秦越啻ならず嗚呼均しく是れ實業家なり而して上官邊に夤縁を求めず下投機の業に手を觸れず獨立自營能く慈能く儉能く謙にして世に超然たる翁の如きは其風を聞きて頑夫も廉に懦夫も立つ者と謂つ可し

嗚呼翁の才の美斯の如し之に尚ふるに學問を以てし其經緯に資する所あらしめんか其計畫施設せられし所獨り此に止まらず其天

下後世を裨益せしこと蓋し測り知る可から
ざるものありしならん然りと雖後嗣忠君天
性至孝學を好み義氣ありて必ずや翁の志を體
し其遺産を以て之を天下有益の事業に投じ
翁の名を後世に發揚するに至らん此の如く
んば翁の竟に不朽なるや知るべし況んや翁
は溫公の家訓を服膺し溟々裏に在りて隱德
を行ひたれば天其嗣を祐くるあるや必せり
余や幼少書を讀み聖賢の敎を師友に聞き加
ふるに頑健の身を以てすと雖德修らず業進

まず仕官既に年ありて邦家に寸功なし空く官祿を食んで報公する所以を知らず今翁の傳を讀み悚然として懼れ赧然として愧づ卷に臨んで悵然たるもの久し忠一郎君の深交を辱ふするの故を以て不文を顧みず聊か所感を述ぶること斯の如し

明治三十四年八月　　正五位　河村善益

甚哉世道廢れ人心の亂るゝ名を衒ひ利を趁ひ驕奢豪侈を恣にし日夕一攫千金の衢に往來して盛に射倖を事とするもの滔々天下是なり業を勵み職に勤め躬行實踐財を積み家を興し而して世を益し人を利するものは曉天の辰星も啻ならず射倖の念日に熾にして奢侈の風月に盛なり夫れ奢侈と射倖とは百弊の源にして風俗の紊るゝ秩序の破壞せらるゝ道義の衰ふる一として射倖と奢侈先づ其端を啓くにあらざるはなし世の識者常に

之を以て恨とす頃日友人藤原忠一郎君亡嚴父源作翁の傳を懷にして來りて余に示さる乃ち受て之を拜讀す翁の性行閲歷を蒐錄して詳なり其區々一商人を以て身を起し孜々矻々業を勵み職に勤め苦心慘憺終に能く巨萬の富を致すと雖も痛く奢侈を戒め儉素己を持し好んで公共の事業に資を投じ貧を憐み困を救ひ而も之を以て深く德とせず又痛く射倖の事業を擯斥し一攫千金の望あるも敢て心を動さず其能く巨萬の富を致しゝは

唯誠實以て事に應じ勤儉以て家業を守りたるの結果たらずんばあらず世の所謂る紳士紳商を以て自ら居るもの此傳を一讀せば皆愧死すべき也獨り世の所謂る紳士紳商のみならんや苟も翁の言を聽き翁の行に視なば惰夫も起つべく貪夫も廉なるべし果して然らば翁の傳は獨り子孫末葉の重寶たるのみならず世道を裨益し人心を興起せしむる豈淺少ならずとせんや忠一郎君余に序を徵せらるゝ余源作翁の言行に深く感ずる所あり文辭

に嫺わざるの故を以て之を辭せずと云爾

明治卅四年八月　　水上長次郎識す

歳月匆々先人の沒せられてより茲に六閲月溫容眼に存し慈訓耳に在り坐ろに往事を懷へば悵然たらざるを得ず

夫れ先人九十有二年の生涯は毀譽相半ばせり而かも知りて知らざる如く泰然として自ら信じ毅然として自から守り敢て之が爲に動かざりき蓋し俯仰疚しき所なきのみならず深く千秋論定まるの日を期すればなり

嗟呼先人は巨万の財産を貽されたり子孫は宜しく之を守り進んで國家有用の資となす

べし幾多の訓戒を遺されたり子孫は宜しく之に遵ひ進んで國家有用の材となすべし若し遺産の守るべきを知りて遺訓の遵ふべきを思はざる人は是實に先人を辱かしむるなり又藤原家を亡ぼすなり兒や夙夜心を此に存して造次忘れざれども天資庸劣加之人事意の如くならざる者十に七八思ふて是に及べば憂心轉た冲々たり

橋本正志氏は深く先人を識り又能く先人に識れ共に德を修め道を講じ業務の經營亦力

を添へたること尠なからず今追慕の餘其言行を彙め之を親戚知友の間に頒たんとす稿成り一讀先人の風丰髣髴として紙上に躍るを見る余其情誼の厚きを謝し併せて數言の微意を述ぶと云爾

明治三十四年八月

兒 忠一郎謹みて識す

一藤原源作翁とは何人ぞ

一藤原源作翁の生涯

一藤原源作翁の言行

附　斷腸日誌

積金遺子孫子孫未能守積書
遺子孫子孫未能讀不若積陰
德於冥々中作子孫長久之計

司馬溫公

藤原源作翁傳

橋本正志編

藤原源作翁とは何人ぞ

三十六の峰巒起伏屛の如く、南より奔りて北に赴き、自から舊王城の外郭を成す、而して其山勢の漸く盡きんとする處に一大古刹あり。秋高く霜白き時に至れば、滿林の楓葉錦を織りて紅燃ゆるが如く、眞に舊都の名勝たり。是れ所謂、洛東の永觀堂にして、藤原源作翁が埋骨の地とす。

源作翁は何人ぞ、性情の圓滿なる發達を遂げたる人にもあらず、深遠なる學術の修養ありたる人にもあらず、云はゞ純平たる一商人に過ぎざりき。然れども其精緻なる頭腦と、堅忍な

る意志とは、凡て事に當つて成功すべきの資質を備へたり、況んや、儉素自から持して操守堅きこと巖の如く、惻隱の情深くして、慈愛廣く人に及ぶものあるに至りては、實に士人の儀表となすに足る。

翁は學殖深からず、故に世上の事物に接し誤解を抱きしことなきにあらず、識見廣からず、故に時としては謬信を免れざりしことあり。其保守的なりしが爲めに、固執の弊は則ちこれなきにあらざりしと雖も、其果斷、決行の勇と毀譽、褒貶を顧みざるの量に至つては頗る多とす可きものあり。

翁は生れて文字の教育を受けたること尠きのみならず、其見聞亦廣しといふ可らず。少壯嘗て上毛の地方に遊びしのみ、其藤原家を嗣ぎしより營々業務を執り、足京都を出でしことと

稀に、加之、齢四十有餘にして、偶々傴僂質斯に罹り、行歩自由ならず、且、其狷介なる氣質は多く人と交るを好まざりしを以て、見聞する所一家一門の事に過ぎず。然れども、日常世上に起り來る凡ての事物に對しては思慮を凝らし、注意を怠らざりき、

翁は又慈善、及び公共の事業の爲めに資を投じて、敢て吝む所なかりしと雖も、其事實を傳へらるゝを避け、又、其名譽の世上に紹介せらるゝ事を好まざりき。進歩と云ひ、改良と云ひ、翁は之を喜ばざるにあらず、而かも、此等の美名を假りて漫に外觀を修飾するが如きは、其極力排斥する所にして、身巨万の富を積みながら、質朴なる居宅に住み、儉素なる衣服を纏ひ、生涯一個の田舍翁たる風丰を以て終りぬ。翁は虛言を吐きしことなし、啻に虛言を吐かざるのみならず、其言ふ所は、必ず行ふ所

と合せり。啻に言行相伴ふのみならず、行は反つて言より先たつの人なりしなり。翁は周到なる思慮と、精緻なる企圖とを以て、一旦創始したる事業に對しては、如何なる障害をも排きて勇進し、非運に際會するとあるも、尚、泰然として之に處する所以を講じ、頽勢を挽回するに至らざれは止まず、而して、其自ら信じて是としたる所のものに於ては、他の情實を顧みず、斷々乎として進むを知るのみ、時に或は冷酷と評せられ、殘忍と罵られたるは、蓋しこれが爲なり。

要之、翁は當時の社會に於ける一種の人物なり、風潮と、流俗との外に立ちて、異彩ある行動を試みし人なり。假令、識見高からず、局量廣からず、學術、藝能に於て素養尠なしとするも、決して尋常の器にあらず、凡庸の才にあらざりしなり。

翁は眼前の小利害、小名譽を度外視して敢て爭はざりき、蓋し理想の光明は懸けて翁が前途を照し、翁をして中心怡樂、以て千秋の公論を待たしむるものありければなり。果せる哉、翁の遺訓は柩内未だ冷かならざるに、今や、事實となり來り、勤儉の主義によりて蓄積せられたる財産の一部は、京都帝國大學に、早稻田大學に、各其基本金として、幾多の人材を養成するの資に供せられんとす。嗟呼、誰か又、翁を稱して守錢奴と云ふ者ぞ、貪慾翁と呼ぶものぞ、主義あり、目的あるの蓄財とは、是を稱せずして、其れ又何をか稱せん。

余が翁と交るもの凡そ三十年、深く其啓發と、感化とを蒙り、頑鈍の資を以て、多少事物の何たるを辨知するを得るに至りしは偏に翁の賜なり。今や斯道頽れて人心紊る、時事の窮まる

處、謹厚、誠實、翁の如き人を懷ふや切なり、即ち其經歷、言行を輯めて此稿を起す、亦以て多年の交誼に酬ひ、併せて世道人心を補ふあらんことを期すればなり。唯だ奈何せん、意到りて筆隨はず、翁の眞面目を發揮するを得ざるを。

藤原源作翁の生涯

徳川幕府の繁榮は十一代家齊の時に至りて其絶頂に達しぬ、而して其衰頽の兆も亦この時に現はる、故老の所謂、大御所樣時代は以て佛國路易第十四の世に比すべし、

翁は實に、此時を以て近江國蒲生郡八幡町に生れたり、正に是れ文化六年の十二月八日なりき。

父を岡田九兵衞と稱し、母をまきと云ふ、干鰯問屋を業とす。翁に一兄、二弟、及び一妹あり。兄は家業を繼ぎて父と同じく九兵衞と稱し、弟重兵衞は隣郡なる神崎郡能登川村馬場嘉兵衞に養はれ、次は五郎兵衞と云ひて、別に一家を興し、妹つきは同町北村次郎右衞門に嫁せり。

翁の實家は、由來、八幡地方に於ける屈指の豪商なりしも、父九兵衞に至り、業務に心を用ゐざりしかば、家運爲めに傾き、資を三兒に分ちて業を營ましむる能はず、將來商界の偉大なる成功者たるべき翁は遂に杉山某の媒介に依り、京都醒ヶ井松原上る、藤原源兵衞の家を嗣ぐことゝなれり、時に翁の齡正に二十。

藤原の家は世々鍵屋と稱し、帷子の模樣付けを營み來りしが、源兵衞に至り、挿花、抹茶等の餘戲に耽りて家業を外にし、年々衰頽に赴くに拘はらず、衣食の驕奢依然として舊の如くなりしかば、祖先傳來の財貨も終に全く他人の手に落ち、僅かに宅地と、家屋とを餘すの有樣にして、其親戚なる上河源右衞門に對してすら、尙ほ、千兩の負債あり、閉店か、破產か、危機旦夕の

間に瀕するも、主人公の惰眠未だ醒めず。

翁は既に實家の衰微を奈何ともする能はずして、藤原家を嗣ぎたるに、今、又、此非運に際會せり。さらぬだに堅忍不拔の氣象に富める翁は、此困難に遭遇して益奮勵し、誓つて家道の頽勢を挽回せんと欲し、即ち從來の帷子商店を閉ぢ、木綿商を營むことゝし、新たに室町通松原上る所に開店し、同じく鍵屋の號を用ひ、忠兵衞の名を稱せしが、是れ今日、京都市中に名高き『鍵忠』なる稱號の起源なるなり。蓋し、翁が此業を創むるに至りしは、單に營利的目的の爲のみにあらず、其一種の見識を懷きしが爲なり。翁は痛く奢侈の二字を厭ひ、身を傷つけ、家を破り、國家を滅ぼすものは、奢侈の增長に在りと確信せしが故に敢て自から絹布類を鬻ぎて、斯惡弊を增長せしむるを好まざり

しなり、而かも、此確信たるや、九十二年の生涯、毀譽と、褒貶とを顧みず、翁が保持せし所なりき。

時なる哉。時は正に德川三百年間の戛執政と稱せられたる水野越前守、老中の職に就きて精勵治を圖り、滔々たる驕奢の弊を矯めんとして、絹布禁制の令を布きし際なりしかば、翁に取りては逸すべからざるの好機會なりき。業を營む未だ久しからずして、社會の信用日に厚く、其取引する所は、只に京都のみならず、『鍵忠』の名は遠く四國、九州の邊に及びたり。天保十一年の頃に至り、翁は全く負債を消却せしのみならず、新たに烏丸通り五條上る處に家屋を購ひ、業務の擴張を爲せり、是れ、現時藤原商社の在る所なり。

爾來、翁は誠實を以て業務を營み、傍ら正確なる金錢の貸付

をも爲し、投機的事業の如き、如何に一攫千金の望あるも斷然排斥して顧みる所なく、又官邊の夤緣によりて利益を求むることを陋とし、獨立獨歩營業に從事し、商運益隆盛に赴けり。然るに、少壯時代に於ける、過度なる辛勞と、衛生上の不注意とは、圖らずも僂痲質斯を起し、齡四十を越えんとする頃、脚部不隨の重症に陷れり。是れ翁が半生涯の一大不幸にして、且、將に大に伸びんとする事業に對し尠なからざるの打撃を與へぬ。然れども翁は此等障害の爲に挫折す可き人にては非ざりき。

　抑も、此重患は翁に取りて固より不幸なりしに相違なしと雖も、尚、之に依りて翁か益其業務に專心し、他日成功の基を作りたりとすれば、强ちに恨むべきにはあらず。爾後、翁は足京都を出です、日夕商店に坐して店員を督勵し、販路を開き、商品を

改め、一々經營慘澹、一身を以て內外の事務を總攬し、敢て倦むことなかりき。明治維新の際、翁は密かに薩長の浪士と交り、或は金員の調達に應じ、或は謀議に參畫し、秘密の運動を助くる等、心を皇家に盡して、幕府の嫌疑を蒙りたること一再に止まらず。此間の消息をして世に傳はらしめは、翁の歷史は幾多の光彩と、幾多の趣味とを添ゆるならんも、惜い哉、翁は終身之を口にせざりしのみならず、當局の其事情を徵することあるも、謙讓して遂に應ぜざりき。偏狹と云へば偏狹なり、然りと雖、之を世の虛名虛譽に趨るものに比すれば、其心術孰れぞや。

明治十四年に至り、其財產全額を四分して四子に配與し、各一家を保たしめ、彼等を共同して木綿商を營ましむること舊の如し。二十二年、之を名づけて藤原商社とし、益營業の鞏固と、

事務の敏活とを計りしが、二十六年七月商法の一部實施せらるゝと共に、藤原四家、忠兵衞、忠之助、源之助、忠一郎の合資組織とし、新たに登記の手續を受けたり、これ京都區裁判所管內に於ける會社登記の嚆矢なりきと。

事業の基礎は此に確立して、磐石の安きを致せしかば翁は是より悠々日を送り、慈善の事業に、公共の事業に、力を盡して社會に酬ひしこと擧るに遑あらず、而かも、尙過絕なる精力を以て商社の經營を爲すこと舊の如くなりき。時に明治三十三年十二月十日病起り、越えて二十五日翁は眠るが如く逝きぬ、噫九十有二年の生涯、勤儉の二字を以て一貫し、世俗と逆ひ、風潮に背き、而かも、奢侈と云へる敵に對しては全力を揮て戰ひ、自己の外に人なく、自己の信ずる外に物なく、儼然として守る

所ありし關西の豪商藤原源作翁の一代は此に終りぬ。唯其遺せし巨万の財産と、嚴正なる家風とは長く百世に傳はるべく、死して死せざるものとして存するなり。翁の訃音一たび傳はるや、奥羽、北海道の端より、四國九州、陰陽二道に至るまで、各府縣より弔詞の到るものの數を知らず、近江、大和、河内、和泉、攝津及び三丹地方より來り會するもの千百十八人、洛東永觀堂の墓域に葬る。壽光院量空明覺石敢居士の墓標は千秋の後に於て、永く斯儉素撲直なる商界の成功者を想はしむるものあらん。

翁兒孫數人あり、各其業務に從事し、別に家を成せり。兒源二は重浪と號して國文和歌に長じ、出で丶職を京都市美術工藝學校に奉じ、入りて稻の舍中の子弟を教ゆ、敦厚にして倦まず、長者の風あり。忠一郎は業を同志社に受け、後轉じて早稻田專

門學校に遊ぶ、誠實の人なり、孫忠兵衞は曩に鴨東銀行相談役、京都綿ネール會社取締役として、能く其名を知らる、忠之助亦嘗て大阪大學分校に遊び、嘗て大阪商業銀行、京都銀行及び京都倉庫會社の重役として實業界に重きを爲せり。其他忠次郎、源之助、源一郎等皆凡物に非ず、又長女まさ、次女千枝の如き、稟性至孝、父に仕へて其心を盡くし、淑德ありて治家の才に富む。嗚呼根底牢として拔くべからず、枝葉亦鬱として深く茂る、翁が生涯の汗血を絞りて經營したる事業は、正に一大盤石の上に立てられたりと云ふべし。兒孫たる者、夙夜忘れず、深く父祖創業の難を察し、協力同心偷らざるに於ては、永觀堂畔一壺の白骨、亦笑つて瞑すべきなり。

藤原源作翁の言行

翁の行爲は多く保守的なりしと雖も、其腦髓は暫時も活動を止むることあらざりき。蓋だし鋭氣一身に滿ちたりしを以ての故ならん、即ち人が新年の賀辭を述べて『新年は御芽出度、尙ほ、本年も相變りませず……云々』と常套語を用ゆるや、翁は曰く、『相變らずでは何の芽出度き事やある、變化ありてこそ進歩もすべし、又樂しくもあるべし』と。以て翁が飽迄も活動的氣象を有せしを見るに足らん。

翁一生涯の過半は半身不隨にて起臥自由ならざりしも、毎朝五時、床を出で、家人に扶けられて椽先きに膝行し、盥嗽し、衣

襟を整へ、天照皇太神宮を拜し、夫より伏見稻荷、北野天滿宮、箕面辨財天、東寺弘法大師を拜し、更に退きて養父母の靈位を拜するを例とし、死に至るまで一日も之を廢せざりき。其格謹にして守る所を變ぜざる、概ね此の如し。

翁が重患に罹りて身體の自由を失ひし後に於ても、毎朝禮拜と、食事を了れば、商社に出でゝ事務を總理する六十年一日の如く、其晩年老衰交々至り、室内に困臥せし時と雖も、尚、業務を廢する能はず、間接の注意を缺きしことなく、忠一郞が夜に入りて歸り來れば、必ず其の日の商況を問ひ、賣上高より購買者の種類等に至るまで遺す所なかりき。又、日々の新聞紙は一々之を讀ましめて默聽するを常とせりき、然かも、翁が聽かん

と欲する所は、小說にあらず、艶聞記事にあらず、實に商況、實業に關する記事にして、之に依りて時價の高低を案し、商品の價額を更正し、決して顧客に對し不當の利益を貪ることなからんことを期せしなり。

翁は寡言の人にして、寧ろ交際上に不自由なる程沈默を守るの人なりき。而して其容易に發せざる言語には、苟くも虛言を見出すこと能はざるのみならず、言行合一を以て翁を評するさへ尙未だ當らず、行ふて而して後にあらざれは言はざるの人と云ふこそ、眞に至當なれ。又、面從して後議するが如きは、翁が最も嫌忌せし所にして、翁は遠慮なく忠告し、助言すと雖も決して其人の去りたる後に、論評を試むる如きは、生來未だ

曾てあらざりき。

翁は知れば必ず行ひ、人に施さんと欲する所は、己れ先づ之を試めり、即ち是を以て事業を起し、是を以て多數の事務員を率ゐ、終始倫らず、毎朝五時に至れば翁先づ起床して家人を起し、夜は家人の寢に就くを待ちて寐ね、食事の如き九十の齡を越ゆるまで、家人と撰ぶ所なきのみならず、時々は、自から其欲する所の滋味を命じ、他と共に喫しぬ。要するに妻子、婢僕を集つめ、團欒食膳に就くことは、翁か生涯の最大快樂なりしならん。

翁壯年の頃、商用を帶びて尾、濃、北越の地方に赴き、歸途木の

芽峠の險路を越ゆ、日正に暮れ、風雪大に至りて、寒威肌に逼る、而れども節漸く歳晚に際し、商家の一分一刻を爭ふ時なりしかば、脚を沒するの積雪、尙之を意とせず、勇を皷して家に歸る、爲めに、此時頗る其脚部を痛めたり、若し期を失せず治療を加へなば或は全癒すべかりしも、身繁務に從事して、靜養するの暇を得ず、其儘に打棄置たり。晚年翁が半身不隨の重患に陷れるは此に因せりと云ふ。

翁年甫めて十七、尙ほ實父の膝下に在りし時なりき、錢壹貫を懷にし、木曾街道を越えて甲信二州より上毛の地に入り、碓氷峠の險を攀ぢ、東山道を跋涉して歸る、風餐露宿乞食と誤られしこともあり、盜賊と認められしこともあり、辛酸の狀筆に

すべからず。翁老後、時々此事を語りて曰く『苦絶酸絶の境に到れば、人もなく、物もなし、唯我あるのみにて、直に天地と合躰するの感あり』と、淺近の言に似たれども、眞に無限の眞理を含むものと云ふべし。

翁は過絶なる耐忍力を有したる人にして、而かも此力は其從事したる凡ての事業に對して注れたり。嘗て商用を帶び、三丹地方に赴きたる際、宮津より京都に歸らんとせしに囊底僅に二朱金一個あるのみ、即ち早朝發程し、普甲峠の峻路を攀ぢ、由良河畔を沿ひ、飢餓を忍びつゝ、三十六里の路を踏み、夜更けて家に歸りぬと。其健脚にして、又不屈の耐忍力ある此の如し。

翁は壯年の頃より絹布を纏ひしことなく、常に地質の堅固なる綿服を用ひたり。然るに明治二十九年、齡正に八十八に躋りしかば、親戚故舊を招き、盛に米壽の宴を催ふす、此時家人に勸められ養父母の靈牌に向ひ、之を告げて、初めて絹の紋服を着せり。爾來、日常にも漸く溫かなる秩父縞などを用ゆるに至りぬ。

飮酒と、喫烟とは翁が最も嫌忌せし所なり、蓋し此二者は嗜好の極、耽溺に陷るべきを恐れたればなり。又翁は壯年の時より、一度も靑樓に登りて賤妓と戲れしことなかりき。以て、如何に其操守の堅實なりしかを想ふべし。

翁は生來酒を嗜み、其量頗る多かりしも、少時實家の父が酒に耽りて産を破りたるを觀、深く感ずる所あり、其藤原家に入りてより、亦、杯を手にしたることなかりしかば、誰も翁の酒を嗜むを知らざりし。偶七十一歳の齢を迎へ、古稀の賀宴を催したる時、殆んと三四升を傾け、又、八十八歳の米壽の宴に臨み、同じく二三升を傾けしかば、家人、親戚等も初めて其大酒家なることを知れり、而かも翁が杯を手にせしは僅かに此二回のみにして、態度嚴然、少しも醉へる模樣さへなかりきと云ふ。

翁終生蝙蝠傘を用ひたることなく、晴雨に拘らず毎に在來の日傘を翳したりき。後、脚部不隨の症に罹りてよりは、外出の際、四輪の人車を製し、丁稚をして之を牽かしめたり。明治三十

年の頃、日出新聞が京都府下の名望家の逸事を輯めて紙上に掲げ、翁の事に及びて曰く、『藤原源作氏は近世の諸葛孔明なり、脚部の不隨なるを以て車を童子に牽かしめて、市中を徘徊し、常に商機の微を觀る』と。人あり之を翁に告ぐ。翁曰く、『吾れ不幸にして病あり、已むを得ず事此に出づるのみ、新聞記者戲惡の、何ぞ甚しきや』と。此より世上の注目を煩とし、敢て家門を出でたることとなし。

或日の事なりき、翁神戸なる日本精米會社の總會に臨まんとて、塚本忠行氏と約し、午前八時の滊車を以て七條驛を發することゝなれり。定刻に先だち塚本氏中等切符を求めて待合室に在り、如何に翁を待つも終に到らざりしかば已むを得ず、

獨り車室に入りて神戸驛に達すれば、翁が從者に扶けられて下等室より降り來るに會ふ、塚本氏大に之を愧ぢて、痛く其勤儉に感じ、人と語りて、談翁に及べば、必ず擧ぐるに此事を以てせりと。翁は終に死に至るまで、決して上中等の滊車に乘りしことなかりき。

或時の事なりき、明治火災保險會社の京都支店長たりし倉知誠夫氏來りて、翁が所有せし貸家三十餘戸に保險を附せんことを勸む、翁冷然之を退けて曰く、『天災亦如何ともすべき道なからん、如かず、無形の保險を各自の腦中に置きて事無からしめんには』と。倉知氏も言なくして去れりと云ふ。

翁は事物を觀る、甚だ明察にして、思慮殊に周密、其金錢貸付の際に於ける担保品の鑑定の如き、未だ曾て一度も誤りしことあらず、其晩年自から雇人を使役せざるも、担任事務の交迭期に至れば、翁は諸兒と謀り、某は何に適し、何に不適當なりと、一々評論する所少しも違ふとなく、常に使役の局に當る者よりも、反つて其性行を知る審なりき。

翁は如何に其感情の激したる際に於ても、疾言遽色せず、店員婢僕等の過失あるを見るや、徐ろに之を招きて、諒々と訓戒を加ふるのみ。又、商業上損失の來らんことを豫知せる際に於ては、百方苦慮して之を避くべき道を講ずるも、事如何ともすべからざるに至りては、亦敢て動かず、悠然として他日に於け

る挽回の策を畫き、決して過去に溯りて其損失を口にし、所謂、死兒の齡を數ふるの愚を爲さゞりき。

翁が物品を購はんとするや、能く其の價格を直切るの僻ありて、而かも、一たび之に從はしむれば、欺かれて粗惡の品なりしことを發見すと雖、再び之に對して云々せしことなく、更に直切る事も、破談する事も敢て爲したる事なしと。

翁既に百万以上の富を致し、京阪地方に於ける屈指の豪商と稱せらるゝに至りても、尙質實なる居宅の外、一の別莊も、別邸も有せざりき。嘗て人に語りて曰く、『如何に宏壯美麗の邸宅を營むも、軀躰を横ふるは疊一枚に過ぎざるべく、又、衣は寒暑

を凌げば足れり、食は腹に充つれば可なり。人生は夢の如し、若し一朝命窮して形骸黄土に委せば、亦何ぞ衣食あらんや、況んや邸宅に於てをや』と。

翁曰く、『棺を蓋ふて論定まるとは、古人の言ふ所なるも、人事決して然らず、碑面苔を生じて漸く論定まるものなり』と。蓋し其自から深く計畫し、子孫をして爲さしめんと欲する事を暗に漏したるものか。

或時の事なりき、男忠一郎人力車に乘りて他より歸る。翁曰く、『汝好んで車に乘る、抑如何の感やある。』と忠一郎答ふるに、時間を省くの利を以てす。翁徐ろに戒めて曰く、『是れ可なり、然れ

ども夫の車夫なるものを見よ、苦役營々、尙、獨力を以て其妻子を養ふにあらずや、之を汝が如き齡三十にして未だ自立する能はざるものに比せば優劣孰れぞや、乘る者は挽く者よりも形こそ立派なれど、孰れが榮にして、孰れが辱なる、汝其れ之を思へ』と。

翁は素より學問の修養ありしにあらず、然れども世上の愚夫、愚婦の如く、漫に未來を說きしことなく、又、未來あることを信ぜず、每に家人を戒しめて、人一たび瞑すれば萬事休むのみ、豈地獄あらんや、又極樂あらんや、佛に供へ、僧を招き百千卷の經を誦するも、畢竟何の用をか爲す、汝等余が意を躰し、此の如き無益の費を省きて、更に之を社會公共の用に投ぜよと。

翁は他の窮困を見て、徒に同情の念を抱くのみならず、如何にして其の窮困を救ひ、更に適當の業務に就かしめんかと熱心斡旋する人なりき。嘗て但馬より彫刻師堀田理三郎(瑞松と云ふ)なるもの、來りて翁の家に投ず、翁は堀田が技能の決して凡に非ざるを知り、雨森白水と謀り、共に力を協せて一家を興さしめ、安全に其業を營ましむ。彼れ是より專心技術を修練して遂に都下の名匠となれり。又、山科屋清八なるものあり、貧困交々迫り、家產既に蕩盡するの悲境に陷りたり、翁は之を憫み、友人と謀り、山科屋相續講を組織して之を救へり。此類の事は眞に數ふるに遑あらず。

翁は公共事業に、慈善事業に、或は神社、佛閣の保存事業に對

し、金錢物品の寄附を爲せしこと頗る多しと雖も、固より世の滔々者流の如く、虛名を博せんが爲めにあらず、又、營業の廣告を爲さん爲めにもあらず。信仰の念、惻隠の情溢れて事の此に出しものなれば、痛く其姓名の世に顯はるゝを恐れぬ。現に火災救恤に際し、銀盃の下賜ありし以來、如何なる寄附金にも必ず匿名を用ひたりき。

翁の公共事業に盡したりし事尠からざるが、往年醒ヶ井松原上る住吉町（翁が當時住せし處）に、佐々木某なる者より町内へ担保品となりたる地ありしが、期滿ちて某は之を償ふの實なく、終に町内へ流れ込み、町民之を持て餘せる姿あり、是に於て翁は私財を擲ちて、家屋を該地に建築し、之を他人に貸與し、

月々借家料を取立てゝ辨償の方法を定め、大に町内の福利を増進せしめぬ。現に今も十三軒長屋と稱し、共有物として翁の遺澤に浴しつゝあるなり。

維新の際、舊法度漸く頽れて、新制度未だ興らず、警察、行政の事務の如き全く放擲せられたる時に當り、伏見、京都間に於ける通路は、處々破壞し、加之、盜賊出沒して夜行の人は尤も不便を感じ、難を覺えたりき。翁は即ち雨森白水と謀り自ら資を捐てゝ夫の錢取橋の邊に一の街燈を建て、白水の筆に成る『石敢當』の三字を刻せり、蓋し深く古事に因れるなり。之より通行頗安全となれり、然れども世人は何者の建立したるやを知らず、只其陰德を稱するのみなりき。後十數年を經、街燈毀損せしか

ば、村民相謀り原形に擬して之を建つ、現存する所の街燈即ち是なり。天龍寺の峨山和尚、流錫の際之を見て、頻りに其美事を賞せりと云ふ。翁が自から石敢と號せられしは實に此に始まれり。

故中井弘氏が滋賀縣知事たりし頃、京都に來り翁を其邸に訪ふて曰く、『足下は如何にして一代を以て斯く巨万の富を積みしか、蓋し其術の存する者あらん、乞ふ之を敎へよ』と。翁莞爾として笑ふて曰く、『眼底一丁字もなき鄙人、豈術の語るべきもののあらんや』と。中井氏强ゆること再三。翁答へて曰く、『鄙人勤儉の二字を味ひ、日常の衣食も、婚嫁葬祭の禮も、敢て分限を越えたることとなし、是れ此富を積む所以なり』と。氏其言に感じて去

り、後絹地に『興業守儉』の四大字を書して贈る。坐に鮫島盛氏あり、翁に謂て曰く『句は簡なりと雖も、君が成業の功を頌して餘あり、況んや筆勢、亦雄健、愛すべきをや、之を表裝して壁上に掲げ、朝夕仰觀せば益以て勤儉の美德を養ふに足らん』と。翁冷然として曰く、『是れ余が夙に實踐せし所、區々の文字、亦何等の用を爲さんや』と。中井氏之を聞き嘆じて曰く『源作は京都に於ける近代の人物なり、其操行堅實、自から守りて變ぜざる所、眞に惰夫を起たしむるものあり』と。

維新の頃、長門藩主毛利敬親公微行して、翁の宅を訪はれしこと再三ありき。伏見鳥羽の戰起る前數日、翁は忠四郎に命じて番頭三人を隨へ、巨額の金を薩摩藩邸に齎らし往かしめた

ることもありき。又、先帝男山八幡行幸の前夜、長州の某々藩士二三人、打連れて翁の許に至り、奥坐敷に於て長時間の密談を凝せしこともありき。而して當時の丁稚たりし佐吉なるものは、兩三回も藩邸なる岩下方平氏へ狀函を携へて使せしともありし由、今尙其記臆する所なり。然れども、此等の事情は翁が死に至るまで一度も語りしこともなく、從て證蹟の尋ぬべきものもなし。唯翁が蓄財は單に無意義のものにあらざりしを想ふべし。後明治二十一年、岩下方平氏は翁が維新の際國事に盡せし功蹟を錄せんと、其獻納せし金額、時日及び當時の形況を詳陳せしむ、書到る、翁笑つて曰く『一片の微衷のみ、亦何ぞ言ふに足らん』と、遂に之に應ぜざりしと。

明治二十年の事なりき、時の自由黨の領袖、星亨、林包明の諸氏、遊說して京都に入り、翁を訪ふて頻りに其力を政黨に用ひんことを勸め、談數千言に互る。翁微笑を漏して曰く、『足下等の言ふ所理なきにあらず、然れども空論果して何の用を爲すぞ』と、流石の星氏等、亦說かずして去りぬ。

翁は純然たる商人にして、然も舊思想、舊風習によりて養はれたるの人に過ぎざりき。然れども其心事は所謂商人根性と異り、胸中常に綽々たる餘地を存して、多く儒士、文人と交れり。雨森白水の如き、神山鳳陽の如き、中西耕石の如き、最も親交ありて、時々相會し、雅懷を語るを樂しみとなしたり。

元治甲子の役は京都に於ける應仁以來の大擾亂にして、洛中、洛外悉く兵燹に罹り、妻子離散し、老幼道途に餓ゆるの慘狀を呈しぬ。翁は此有樣を見て同情の念抑へ難く、私財を投じて窮民を賑ひたり。又、明治六年に夫の『稻荷燒』の災ありて、數千戶忽ちに烏有となる。翁は米穀を購ひて罹災の民を救へり。大政官之を賞して銀盃を賜ふ。十二年丁丑戰後の疲弊交々至り、米價暴騰し、金融必迫して、細民の困苦其窮に達するや、翁は倉を開きて救恤し、尙、濃尾の震災、十津川の水災、三陸の海嘯の如き、其報を聞くや、各若干づゝの金員を寄附する所ありたり、而して每年十二月に至れば、餅米數石を購ひ、之を小餅に製して區內の貧民に惠むを常とし、終生止めざりき。

翁の知人に井上某なる者あり、其初め甚だ零落せりと雖も、翁の助力を得て家業益隆運に赴けり。某常に其厚誼を服膺し、寒暖必ず起居を問ふ。或時一邸宅を營み、落成の宴を催して翁を招く、翁往て賀す、坐に一屛風あり、全面の裝演悉く前年翁より借りたる負債の證書を以てし、且つ曰く『昔日の洪恩此に在り、肝に銘じて忘れざる所なり』と、翁溫顏笑を含みて曰く、『是れ豈に予の力ならんや、全く足下が精勵刻苦の致す所なり』と。亦淡として知らざるものゝ如かりき。

翁は職業の尊卑を云々する如き固陋者流にあらず。何れの職業にても誠實を以て營む時は、高尚に、愉快に、俯仰して愧づる所なしと信じたりき。明治二十九年の頃、金錢の貸付が一の

營業と認めらるゝに當りては、親戚の二三氏之を厭ひ、翁に告ぐるに、其業を止めんことを以てす、翁敢て省みず、蓋し深く自から信ずる所あればなり。何ぞ知らん、嘗て金錢貸付の職業を厭ふたる某氏等は、今や、或高利貸の資本主として、恬然耻づる所なきが如し。翁泉下に之を聞かば、其れ何とか曰はん。

天龍寺の滴水禪師は翁を知る深く、翁亦歸依すること甚だ厚し。嘗て司馬溫公の語を書し、之を翁に授く。曰く、

司馬溫公曰、積金遺子孫、子孫未能守、積書遺子孫、子孫未能讀、不若積陰德於冥々中、作子孫長久之計、

翁は此語に感じ、拳々服膺、掲げて座右の銘と爲し、終生陰德を積み、守賤奴と呼ばれ、『鬼忠』と稱せらるゝも、敢て顧みずして、識

者を天下後世に俟てり。

翁は塚本忠行氏(舊稱與惣治)と深交ありしが、氏没せし際、其遺業としては何等の稱すべきものなく、唯積み置し數十万の財產ありしのみ。人々翁に謂て曰く、『塚本氏とも云はれたる人にして徒らに財を集め、子孫遊食の資に供せしは、實に其意を了すべからず』と。翁肯ぜずして曰く、『余と與惣治とは別けて懇意の間柄なりき、彼は空しく守錢を以て本領とする人にあらず、暗々の裡に一大事業の基礎を作り置きしならん、子孫必ず之を完成すべし、足下等漫りに皮相の見を以て他を評するは誤なり、人生の事は棺を蓋ふのみならず、碑面苔を生じて、其得失を論ずべし』と。嗚呼翁の謹厚なる、忠行氏を信ぜしこと此の

如し。知らず、忠行氏の子孫たる者、果して翁の豫言に背かざるべきや否や。

翁は晩年全く俗交を謝して、獨り家庭の清福を樂めり、蓋し世道人心の日に浮薄に陷るを慨き、其己れを潔ふせんと欲してならん。而して時々家人に扶けられ、車を驅りて、自然の風物を尋ね、翠暗き東山の畔、流清き鴨川の涯、櫻花雪の如き高台寺の春、紅葉錦に似たる眞葛原の秋、悠々自適觀賞を縱にし遊び倦みて家に歸り、忠一郎及びてる等を集め、茶を啜りつゝ、其見聞する處を語る、其胸懷淡として水の如く、功名何物ぞ、富貴何物ぞ、紛々たる毀譽、其れ吾を如何せんと云ふが如き、意興ありとや云はん。

翁が晩年の事なり、一日寒氣烈しき時、忠一郎に謂て曰く、『余は汝が爲めに二重マントを購ふも可なり、然れども翻て思へ、世上幾多の細民は、更に汝よりも飢寒に苦しむ者あらん、今其資を轉じて是等貧困の民に惠まゝ如何ぞや』と、忠一郎翁の慈心に感じて之を賛せしかば、翁は直に若干の金員を、上、下兩區長に寄贈して配與の手續を爲さしめたり。忠一郎退て曰く、『吾れ無形のマントを着け、溫情骨に徹す、亦何をか望まん』と。

翁は生來保守的の資質を備へ、凡ての事古風を愛するの人なりしと雖も、亦、決して文明的事業を閑却せず、文明的人物の養成を忘れざりき。曾て語りて曰く『今日の人は只眼前の毀譽

と、利害とに齷齪し、絶て永遠不朽の大計を講ぜず、實に嘆ずべきの至なり。夫の教育事業の如き、世上多くは今日之を創め、明日其効果を收むる能はざるより、迂遠として棄てゝ省みず、財を蓄へ、產を積むの輩は徒らに子孫の爲め遊冶放蕩の資を供ふるに了るのみ』と。蓋し人材養成につきては多年深く意を注ぎ、後世の遺業とせんと期せしものあり、其守錢奴と呼ばれ『鬼忠』と呼ばれ、尙顧みずして自から信ずる所を行ひしは斯抱負ありて然るか。翁は明治三十一年十月に遺言書を作り、特に、庶子忠一郎に數万金を讓りて、翁が遺志を續ぎ、社會公共、人才養成の爲に使用せしめ、翁の兒孫は勿論、商社店員に至るまで各遺贈する所あり、而して遺產の大部分は藤原商社に遺し、子孫をして之を確守し、藤原家万代不易の基礎たらしむ。沒せるの後

翁が遺志は果して事實となり、京都大學と、早稻田大學に寄贈せられたる數万の金は、今や、正に育英の資に供されんとし、藤原商社の隆盛翁在世の日と異る無し。眞に是れ『藤原源作翁とは如何なる人ぞ』なる疑問を解釋すべき一大事實なりと云ふべし。

翁は事業上に對しては樂天的ならず、寧ろ悲觀的なりき。日清戰役後、企業熱盛んにして、民間經濟の膨脹底止する所を知らざるを見るや、翁は近き將來に於て不景氣の襲來すべきを慮り、常に之を以て商社を戒しめ、又其經營を怠らざりき。

翁壯年の時、烏丸五條上る處に、木錦商店を起して數日なら

ざるに、一番頭あり、或る朝店の戸を開かんとして、圖らずも厨子入りの畫像一幅を發見せり。人あり、告げて曰く、是れ江之島辨財天の尊像なりと、今にして之を得る、實に瑞祥なり、願くは之を祭れと。翁喜んで邸中に小祠を營みて安置し、信仰死に至るまで偷らず。

明治の初年、北野天滿宮の守本尊に貳體の觀音像あり、一は足利義滿の寄進にかゝる白金の像にして、他は足利義持の寄進にかゝる白銀の像なり。共に境内の松柏院に安置せられたるが、神佛混合禁止の令布かるゝに至り、院の僧之を質にして金若干を借り、期に至り之を受け出さゞるより、質屋は將に潰金物屋に賣却せんとす。翁之を聽くや私財を投じて受戻し、更

に有志と謀り、因幡藥師境內に一堂宇を購ふて之を安置す、現存する西の坊觀音堂是なり。

觀音像及び因幡堂につきて記錄あり、今之を抄錄せん。

京都府山城國京都市下京區烏丸通松原北へ入因幡堂町

眞言宗新義派　西之坊

本尊十一面觀音

白銀無垢座像の軀

身長	壹體	一尺四寸八分
	貳體	一尺四寸一分
躰量	壹體	百五十匁
	貳體	八百匁

謹みて其由緒を案ずるに、北野天滿宮本地佛にして、人皇七十四代鳥羽天皇の御宇、天永二年六月、大江匡房勅を奉じて、本地十一面觀音菩薩の尊像を北野の社壇に納め玉ひしに、天福二年同社炎上の節灰燼とならせ玉へり、其後應永二拾二年八月、足利四代將軍義持公靈夢の奇瑞に感じて白銀十一面觀世音を寄

附せられ、同三十年二月、足利五代將軍義滿祈願成就の爲め一躰を寄附せらる、共に天滿宮の神靈として本社に奉祠す。然るに明治維新の際、神佛別立の令布かれ、斯かる靈像も空しく商估の手に委せんとするを慨き、篤信の士藤原源作及薩藩の有志池田源之助等發願し、當寺大師堂に安置し奉れり。

因幡堂

天德三年、中納言少將因幡守橘行平、勅使として因州の一の宮下向の節、同國賀留津の海中より藥師佛の尊像を感得し、長保五年、己れの邸宅を改造して佛閣とし、斯尊像を安置し奉り、因幡堂と號す。

一條天皇御尊敬淺からず、終に八ヶの子院を御創建あらせられて、之を僧坊とし、本尊を勅封して永世不朽の勅願所と定め玉ふ。

高倉天皇承安元年四月、御命名平等寺の勅額を賜ふ、爾來一山を平等と總稱す、當寺は即ち平等寺一山八千院中の一院なり。

翁は敬神家なり、或意味に於ては寧ろ迷信者と云ふべき人

なり、從て諸處の神社に金圓物品を寄附したるの類は、擧ぐるに遑あらざりき。明治十七年には伏見稻荷神社の裏門通りに敷石を布設し、二十七年には更に北手の水盥際より起り、社務所前を徑て、石壇下まで及び社務分局の北手の石壇をも新設し、二十八年九月には本社より、社務所に至るまでの敷石を布設す、則ち現時存在せるものなり。三十三年には同奥宮の玉垣を修理したり。又、北野神社には七寶燒の大花瓶一對を納め、永代生花料を寄附し、管大臣神社も同じく七寶燒の花瓶を寄附せり。而して、翁が是等の寄附を爲すに際しては、豫め其社の祠官に謀り、需むる所の物品を以てす、蓋し徒らに無用及び不急に了らんことを慮ればなり。其用意周到なる概ね此の如し。

翁は終生其一身を業務に委ね、絶えて他の嗜好に耽ることあらざりき。唯中年の頃より古器物を愛玩し、書畫に至りては頗る其趣味を解せり、然れども此を以て忙中の餘戲となし、敢て之が爲めに日常の事務を怠りしことなし。恰も明治十四年、翁齡七十三に躋りし時、其餘命の長からざるを想ひ、秘藏せる珍品を四分して、之を長男源兵衞、二男忠四郎、三男源治、四男忠一郎に分配せり、而して忠一郎が尙幼なるを以て、成長の後之を與へんとて、其手許に殘し置きたるも、故ありて、二十九年に至り、其優秀なるものを拔き、之を翁が一生の心血を灑きて經營せし藤原商社に寄贈せられたるが、其品目は左の如し、

一董其昌寫桃源の圖　絹地着色　青木夙夜筆　一幅

一蒙古來の詩　絹地　賴山陽筆　一幅

一穐社日の圖	絹地着色	大雅堂霞樵筆	一幅
一百老の圖	絹地着色	謝蕪村筆	一幅
一蘭亭の圖	絹地淡彩	呉春筆	一幅
一赤壁の圖	横物絹地着色	呉春筆	一幅
一西湖の圖	絹地着色	謝蕪村筆	一幅
一天臺山の圖	紙地	伊孚九筆	一幅
一山水の圖	絹地着色	明人章聲筆	双幅
一長江飛雪の圖	絹地着色	明人藍田叔筆	一幅
一元旦參軍早朝詩	絹地	明人顏桃陵筆	一幅
一山水の圖	絹地墨畫	陳逸舟筆	一幅
一山水の圖	絹地着色	朱昂之筆	六幅
一僊山樓居の圖	絹地着色	三嶽道者池無名筆	一幅
一水墨山水の圖	紙地	雨亭筆	一幅
一書	紙地	黃檗七禪師筆	七幅

一瞎驢眼の書　紙地　費隱禪師筆 隱元禪師與書　一幅

一龍虎貳枚折　紙地　圓山應擧筆屏風　一雙

一書　紙地　費晴湖筆屏風　一雙

一古松の圖　絖地　陳南蘋筆　一卷

一武陵桃源の圖　小襖絹地着色　謝蕪村筆　四枚

一古銅蓋付鼎　一個

一古銅の鍑　一個

而して、左の品類は翁が遺愛の珍品として、沒後忠一郎に殘されたる者なるが、忠一郎は翁の遺志に遵ひ、漫に匣底に秘するの世を益する所以にあらざるを思ひ、之を帝國京都博物館に寄贈せり、斯親にして斯子あり、眞に美事と讃すべし。

一謝蕪村筆、絖地野馬屏風　六曲着色　一雙

註曰、謝蕪村は寡慾の人なり、一日弟子某某等相集り雜談す、一人あり、奇妙なる事あり、先生近頃ろ富籤を購はれたりと、數子愕然として平素寡慾の先生にして何ぞ此

の事あらんやと、容易に信させず、終に事の有無を蕪村に問ふに至る、蕪村、平然として答ふ、然り萬一を僥倖せんとして富籤を購ひたり、夫は自分、生來未だ絖張の屏風を畫きし事なし依りて一度は丹青を盡して一代の傑作とも稱すべきものを畫かんことを願ふこと爰に年あり、然れども君等の知らるゝ如く赤貧洗ふが如くにして自ら屏風を購ふの資に窮せり、依りて百方苦慮の末、富籤を購ひ僥倖にして當り籤ともなれば、之を以て屏風を購ひ一世の心血を灑ぎて畫かんと欲するのみと、弟子等蕪村が意を諒し爲めに特志の士に謀りて屏風講を組織して靈腕を振ふを得せしむ、蕪村、欣喜踴躍、心肝を練り丹青を振ひ、鍛練數旬にして畫かれたるもの、即第一番に屏風講員に頒たれたるものにして、實に蕪村が一代中の傑作とも稱すべきものなり、石敢翁、偶然之れを購ひ生前最も秘藏せられたり

一松村呉春筆、大江山之圖屏風　紙本淡彩　一雙

註、三井家、數代の祖に頗る風流の主人ありて特に畫を嗜まる、時の名手、松村呉春に命じ何にても最も面白き傳記物語を首尾盡く壹雙に收め畫くべしと、呉春、此需めに應じ源頼光が大江山の鬼退治の傳説を畫けり、即、頼光等主從、攝津住吉の社に祈請するに初まり、酒呑童子の首級を得て凱歸するに終る圖を畫けり、主人其奇想を賞し最も愛玩せられ、交遊の人々に誇示せらる、然るに主人一日重患に罹り恰んと回春の期なく命旦夕に迫れり、時の名醫高階國手盡碎精勵、終に病全く癒ゆるに至れり、主人喜びの餘り何なりとも望みに任して一命を助けたる此の　頁國手に贈ら

んとす國手も又た風流の人、即ち主人が愛藏の此の屏風を懇望し、爾來高階氏の愛玩する所となる、國手沒後、故ありて石敢翁の購ふ所となり生前珍藏せられたり

一吳月溪、筆、青綠山水之圖　絹地着色　一幅

註、松村吳春、初め月溪と號す、後、吳春と改む、一世の名手たり、晩年病て頗る重躰となる、即、高階國手の投藥に依り幸に治するを得たり、時に吳春、屢々窮を告げ藥價を辨ずる能はず、依りて情を國手に語り勞を以て藥價に替へん事を乞ふ、國手笑て云はるゝは君は中年以後、再ひ月溪の號を用ひず願はくは我か爲めに特に月溪の號を用ひて最も緻密なる青綠山水を畫かれよと、吳春、喜び諾し、靈腕を振ひたるものなり、畫成る、國手も又た大に喜び之れを座右の壁間に懸けて旦夕樂まんと表具師に命じて表裝せんとせらるゝに國手も又た家計、裕ならずして表裝に用ふる織物裂を購ふの資に苦まる、即、内室が襲藏せらるゝ所の帶を割愛せしめ之れが裂地を以て表裝し愛玩せられたり、國手沒後、故ありて石敢翁、購ふて生前尤も樂まれたるものなり

一大雅堂霞樵、筆、麻姑仙檀圖　絹地着色　一幅

註、是れ有名なる大雅堂、池野秋平先生の畫く所にして圖は葛稚川、神仙傳、中の麻姑仙の傳にして精巧緻密を極む、先生、畫く所の最も緻密なるものなり、一見、魄飛び神躍り、好事家の垂涎して措かざる所のものなり、上部に麻姑仙の傳を書す、隷躰にして方一分の細字なり、書する所、實に八百九拾二字、先生が傑作中の最傑作、神品中の

神品とも稱すべきもの、石敢翁の最も愛藏せられ、生前、常に座右に懸け樂まれたるものなり

一物茂卿、眞蹟、大横物、草稿　一幅

註、是れ荻生徂徠先生、示竹亭大兄詩の草稿なり、往年、京都に於て徂徠先生筆蹟の展觀ありしことあり、然るに神山鳳陽先生、徂徠先生の眞蹟なるものを珍藏せられ、先生が最も自慢の幅なり、鳳陽先生展觀席に於て此の草稿を見て感歎して云はるゝは此の草稿に對比すれば我が秘藏の幅も又た及ばざるや遠し、實に徂徠先生の眞筆蹟は此草稿に於て見るべきのみと、歎稱せられたるものなり

一琵琶行圖　中西耕石畫　貫名菘翁贊　尺八絹本着色　一幅

註、是れ白居易が琵琶行の詩意を圖するものにして中西耕石翁が丹青を凝して畫きし所なり、石敢翁之が贊を貫名菘翁に依囑して白樂天が琵琶行の詩を書せしむ、時に菘翁齢老ひて細字を謹書するに苦む、且つ既に青緑の密畫あり、而して後に書す、或は恐る誤字書損の憂あるを依て事に托して之れを辭す、石敢翁肯かず、菘翁、書する所の磐若心經（絖地）を贈り以て謝す、石敢翁尚肯かず、止むなく老眼を活し衰腕に呵し、終に全文六百二字の長編を細字にて書せしもの石敢翁、生前愛玩せられしものなり

一貫名菘翁、筆、般若波羅密多心經　一幅

註、是れ貫名菘翁が大作中の大作、傑作中の傑作なり、往時、洛東、東福寺に吉山晁禪師

（晁殿司）の四百年の大遠忌を營まる、時に菘翁、謹て筆硯を呵し潔齋して長さ壹丈貳尺に餘る大畫棧紙に磐若心經全文を書して寄進せられ、禪師遠忌の式中は有名なる晁師の筆に成る涅槃像の圖と共に本堂に並び掛けられたり、此幅、右方の下に「吉山兆禪師四百年忌辰展觀書畫印」なる朱印を捺しあり、後、故ありて石敢翁の藏せられし所なり

一中西耕石筆、金碧青綠、蜀山道圖　尺八絹本　一幅

註、是、中西耕石先生、一代中の傑作なり、某氏なる人あり、耕石先生に謂て、將に黄金拾枚を投じ繪具料とせん、先生敢て一代中の大作を畫かれよと、先生首肯す、爾來拮据、揮腕、年を越ゆる三たび、某氏畫の速に成らんことを乞ふ再三、爰に至りて初めて成る、圖に對して先生獨り得々たり、即、之れを某氏に示す、某氏期の後れしを怨み云ふ、此圖や頗る好しと雖も怨むらくは繪具の使用の足らざるをと、先生聞て大に怒り、君又た言ふ乍れと、會ま座に石敢翁あり、先生翁を顧み之れ予が一世の心血を濺きて畫きたるもの、之を君に贈らん、希くは永く君の座右に置けと、爾來石敢翁最も愛藏し且つ屢々此事蹟を語られたり

一若冲筆、青物涅槃圖　紙本墨畫　一幅

註、是伊藤若冲翁が戯作にして六尺に餘る畫棧紙に蘿蔔を涅槃像に擬して中央の籠上に横り百菓蔬菜の周邊に蒐集し痛歎するに擬したる圖にして、實に翁の奇想なる稀有の珍品なり、石敢翁生前特に珍重せられたるものなり

一大雅堂霞樵筆	白依観音圖	紙本墨畫	一幅
一田能村竹田筆	魚籃観音圖	紙本淡彩	一幅
一駒井源琦筆	唐美人圖	紙本着色	一幅
一野呂介石筆	松林閑居圖	絹本着色	一幅
一菘翁筆	老松零芝圖	絹本墨畫	一幅
一帆足杏雨筆	山水之圖	四尺巾絹本淡彩	一幅
一帆足杏雨筆	山水之圖	春夏秋冬四幅對絹本淡彩	四幅
一呉月溪筆	百老之圖	紙本淡彩	一幅
一彭百川筆	山水之圖	絹本着色	一幅
一釧雲泉筆	山水之圖	絹本淡彩	一幅
一摩島松南筆	山水之圖	紙本墨畫	一幅
一蒹葭堂筆	挑源之圖	紙本淡彩	一幅
一長町竹石筆	山水之圖	絹本淡彩	一幅
一梅闢筆	山水之圖	絹本着色	一幅

一石希聰筆　西湖之圖　絹本着色　一幅

一葉道本筆　佛手柑尾長鳥圖　紙本淡彩　一幅

一約菴沈治筆　蓬萊仙館圖　絹本墨畫　一幅

一陳逸舟筆　青綠山水圖　絖本　一幅

一孫師昌筆　花鳥圖　絹本着色　一福

一張莘筆　榮貴聯芳圖　紙本着色　一幅

一笠人姜漁筆　鹿ニ長尾鳥圖　紙本着色　一幅

一宋懋晋筆　櫚庭多落葉圖　紙本墨畫　一幅

一鄭培筆　花鳥圖　紙本着色　一幅

一江稼圃筆　零芝之圖　絹本墨畫　一幅

一伊孚九筆　扇面山水之圖　着色　一幅

一陸萬里筆　墨蹟　一幅

一盛茂暉筆　五百羅漢像　紙本着色　一幅

一藍田叔筆　淺絳色山水圖　紙本　一幅

一黄其佩指頭畫　杏林春牧圖　柳溪漁隱圖　商山採芝圖　廬山觀瀑圖　四幅

一李淵泰筆　山水畫帖　紙本着色　一帖

一浦上春琴筆　花卉蔬菓横卷　絹本着色　一卷

一菘翁筆　山水圖横卷　紙本墨畫　一卷

一呉春筆　金屏風二枚折水墨古松圖　半雙

一皆川愿筆　書畫張交六曲小屏風　一雙

一頼山陽筆　文治經卓歌額　絖本　一面

一頼三樹筆

一梁川星巖畫並題詩

一梁川星巖題詩張氏紅蘭畫　雙幅

一己弟三樹處士五絶眞蹟　紙本　一幅

其他數拾幅

一鬱紅五彩雲龍穿海濤火入　青木木米造　一雙　共箱

註曰、是れ有名なる粟田の陶工青木木米翁が造る所なり、其圖の精巧緻密を極むる色彩の異麗なる氣韻の高き、實に翁が獨特の技倆を顯はしたるもの、先人が苦心經營の蹟歴々として見るべく、翁が一代の傑作中の傑作と稱するも過言に非ざるべく誠に稀有の絶品たり、實に後世、陶工の龜鑑となるべきものなり

一交趾急須　青木木米造　一個　共箱

一李仲芳寫急須　青木木米造　一個　共箱

一茶盌山水人物染付　大明成化年製　五個　箱入

一猪口捻し染付　大明成化年製　五個　箱入

一獅子牡丹染付大鉢　肥前　一個

一黄南京平鉢　一個

一古染付菓子入　丸食籠形　一個

一大水晶玉　徑四寸五分　一個

一青貝欄干付卓　大明製　一個

一萬暦模樣食籠　長寛作　一個

一グリ花形大盃　一枚

一グリ軸盆　一枚
一鎌倉彫丸盆　一枚
一色蒔繪菓子盆　五個
一黑漆書棚　堀田瑞松作　一個
一古銅鍑　秦藏六作　一個
一古鑑鼎　一個
一饕餮紋火鉢　秦藏六作　一個
其他數拾品

翁の庶子、忠一郎及び其妻てる、天性至孝、奉養十二年嘗て温凊の禮を缺きしことなく、翁亦之を鍾愛す、而して翁が病に就くや、憂慮措く能はず、朝夕枕邊に侍り、看護怠らざりき。天命遂に窮り、事休むに至り、喪に居りて哀痛遣る所なく、筆を執り詳かに病臥より臨終までの狀況を記し、名づけて『斷腸日誌』と云ふ。敢て他に示さず。其文辭巧ならずと雖、眞摯の情紙面に溢れ、字々皆涙なり。即ち懇請再三、此に之を掲ぐ、以て翁が如何に安靜に永眠せしかを知るべく、亦以て聊か孝子の心を慰むるものあらん。

斷腸日誌

明治三十三年十二月

十日。 此日巳之日にして、父上は例に依り精饌し居られたるに、恰も和田萬藏、久留米よりの土産として朝鮮飴を贈りしかば、誠に珍らしきものなりとて賞味せらる、其量甚だ多く、遂に

午後より持病の胃痛を起せり。
十一日。胃痛尚止まざるのみか、益甚しき模様にて苦惱せらる。午後に至り、醫師戸野京造氏の來診を乞ひしに、脈膊躰溫共に異常なし、例の胃弱症なりと診して去る。
十二日。胃痛頗る輕快に赴き、他に異症を認めず、精神も至極静平なりしに、午後四時頃に至り、突然眠るが如くして、食事の眞似を爲し、或は鼻液を拭ふ眞似をなし、殆んど正氣を失ひて、夢中に在る如きもの一時間、忽ちにして舊に復したり。戸野氏來診したるも、脈膊、躰溫共に昨日に異なる所なく、夜も亦然り。
十三日。胃痛全く癒へて、動作も少しの異狀なし。戸野氏、午後三時來診、四時に至り、又々昨日の如く、食事の眞似を爲さるゝに依り、夕食を進めたるに茶椀箸などを取落すなど手元確なら

ざるの樣子なり。然して手を合せ、辨才天を拜し、稻荷神社の御供を戴く眞似などを爲し、或はてるを呼びて、取り留めもなきことを云はるゝより、家人は心痛に堪へず、再び戶野氏を招き診せしむるに、脈膊普通、躰溫は三十六度三分なり。八時過に至り、戶野氏再び來診、熱度三十六度四分、更に異狀もなくして、此時漸く正氣に復し、氏に對して厚く謝し、云はるゝ樣、『足下度々の御足勞誠に恐れ入る次第なり、拙老平生の過食、斯く胃痛の原因を爲せり、爾後十分に攝生を加ふべし』と。言語明晣、少しも衰へたる摸樣なし、然れども夜十一時頃より、又々囈語を吐き、終夜安眠せられず。

十四日。心身甚だ爽かなる氣色に見ゆ。午前六時起床、九時戶野氏來診、脈膊、躰溫を診するに異狀なく、徐ろに曰はるゝ樣、『昨夜

は惡夢に襲はれ、安眠する能はざりし』と。十時頃、父上の親友にして熟懇の間柄なる井上傳四郎氏見舞の爲め來りしが、同氏に對し永年の厚誼を謝し、且つ言はるゝ樣、『足下と數十年の間、苦樂を分ちて兄弟も啻ならざる交を結び、一度と雖、喧嘩、爭論せしことなくして今日に至れり、然るに奈何せん、死生は命なり、玆に足下と幽明の訣を爲さんとす』と、泫然涙を流されしかば、傳四郎氏慰むるに辭なく、顏を掩ふて泣くのみ。又、姉上(千枝)に向ひ、『今日午後汝が家に至り、御先祖の靈牌を拜して永々の御暇乞を爲さん』と云はれ、更に忠兵衞、忠之助及び余に對し、懇ろに藤原商社創業の苦心より經營の困難を說き、骨肉力を協せて、商社の盛運を永遠不朽に維持すべきを諭さる。嗚呼、父上の無心靜觀は命運の旣に窮まれるを知りて斯く最後の訓戒

を與へられたるか、遂に是れ遺言となりし事は思ひ起す毎に涙のみなり。此の如き次第なるを以て、醫學士島村俊一氏を招き、戸野氏と立會ひて診察を乞ひしに、脈膊、躰温に何等の異狀もなく、只或事の爲め神經を刺激したるより起りたるものなれば、十分精神の安靜を保たしめよ、との注意を與へて去る。夜九時より快く眠に就かる。

此日來訪者千枝、忠兵衛、忠之助(何れも父上の特に呼ばれたるなり)、井上傳四郎氏。

十五日。　午前八時起床、平常の如く朝飯を了へたる後、再び眠に就かる、午後に至り五時頃、戸野氏來りて躰温、脈膊に異狀なきを診せらるゝも、連日の經過と云ひ、殊に老人の事と云ひ、家內の配慮一方ならざりしかば、大學醫院の內科部長たる笠原光

興氏を迎へ、戸野氏と立會の上診察を乞ひたるに、島村氏の云ふ所の如く、デメンスの外、胃弱と、右肺の上部を痛めたるとの症候ありと云はれたり、夜九時頃、少量の便通ありて安眠。

此日來訪者源二、千枝、富七、宗七、佐七、岡田平助、柴田やす。

十六日。　午前五時過ぎ目覺むれば、忠一郎が商社の當直なるにも拘らず、其枕邊に座するを怪むの樣子なり、乃ち其精神を激動するを慮り、此より改めて次の間に侍ることとす、夫より眠られず。六時、例に依り盥嗽禮拜を爲し、粥二椀と、金線魚の味噌漬、氷魚の卵とぢ汁を喫せられたり。午前に便通あり、胃痛は終日止まざりき。五時戸野氏來診、脈膊、躰溫異症なし。午後八時、粥小量と、鯛の昆布酢、鯛の煮付とを喫す。此朝大便試驗の結果、多數の蛔虫の卵あるを發見し、且つ尿に少量の淡泊質を混交する

を認む。

此日來訪者、富七、佐七、柴田やすの妹しま。

十七日。午前七時起床、盥嗽禮拜し、八時過、粥二椀と、鯛の昆布酢、煮貫き卵を喫す。何となく氣分快からず、言語を發せらるゝこと少し。正午、粥二椀と、金線魚の燒物を喫し、午後三時頃、少量の壽司と、甘鯛の汁を喫し、四時過、粥一椀と、甘鯛付燒半尾を喫し、五時頃、粥一椀と、鷄肉の時雨煮を喫す。六時、戸野氏來診、八時過、村尾榮順氏來診、脈膊、躰溫常の如し。九時、金線魚少量を喫せらる。

此日來訪者忠兵衛、上田政。

十八日。午前二時、惡夢に襲はれて目覺む。壚茶一杯を飮み、遂に眠らずして、七時二十分起床。例の通り、盥嗽禮拜を了へ、八時、粥

二椀と、煮貫き卵二個を喫し、暫時安眠。十一時二十分、粥二椀と、鯛刺身、鯛頭汁を喫し、午後又安眠、四時三十分、蒸壽司二椀と、鯛煮附少量を喫しつゝ忠一郎を呼びて、壽司少量を分與せらる。七時頃、粥一椀と、鷄肉少量を喫す、戸野氏來診、脈膞、體溫如常、終夜安眠。

此日來訪者源二、佐七、芳春院管廣洲師。

十九日。午前四時、目覺めて、七時起床。連日の病苦にて頗る疲勞の體なり、然し例に違はず盥嗽禮拜を了へ、八時二十分、粥二椀と、鰆の葛掛けを喫し、快く談話などせられたり。十一時三十八分、粥二椀と、金線魚若干を喫し、午後二時より暫時安眠。村尾榮順氏及び戸野氏前後して來診、脈膞、體溫如常。五時、粥一椀と、金線魚の付燒を喫す。六時、便通多量、蛔虫三尾混合す、九時三十分、

蒸壽司一椀を喫して安眠。
此日來訪者富七妻みち。
二十日。午前一時半、目覺む、苦惱甚し、二時過、便通あり、八時十五分、起床、盥嗽禮拜を了へ、九時、粥一椀と、鰆付燒、鷄肉たゝき汁を喫し、十時三十分、少量の便通あり、正午、粥一椀と金線魚の味噌漬を喫し、食後一時間餘安眠。午後三時二十分、戸野氏來診、脈膊普通、體溫三十七度二分、他に異狀なし、五時四十分、粥二椀と、卵一個甘鯛の汁を喫し、七時、按摩師山中まつ氏來り治療す。
此日來訪者平野吉兵衛、井上傳四郎、松田喜久藏、野々口治郎兵衛の諸氏及び千枝。
二十一日。午前四時、目覺む。七時四十分、起床、盥嗽禮拜を了へ、八時四十五分、粥一椀と、甘鯛燒物、鷄のスープを喫せり。十一時三

十分、粥二椀と、鴨肉スキ燒を喫して安眠の後、三時二十分に至り、蒸壽司二椀を喫して再び安眠。六時、粥一椀と、生カマス燒物を喫す。七時、戸野氏來診、脈膊、體溫如常、又、山中氏來り治療す。夜安眠。

此日來訪者佐七妻らく、石田彦兵衛氏。

二十二日。　午前一時より四時過頃迄目覺む。七時十分、起床、例の通盥嗽禮拜を了へ、八時二十分、粥二椀と、豆腐葛引を喫し、十一時四十分、粥一椀と、山芋砂糖煮、大根煮を喫し、快よく眠を催して、午後四時、精饌壽司と淺草海苔を喫し、五時五十分、粥二椀と、金線魚味噌漬を喫す。七時戸野氏來診、脈膊如常、體溫三十七度三分、夜安眠。

此日來訪者辻本朔二郎氏。

二十三日。　午前二時頃目覺め、七時十分、起床。盥嗽禮拜例の如し。八時四十五分、粥二椀と、鷄卵半熟二個、鴨肉スープを喫し、十一時四十分、粥二椀と、エソ付燒を喫し、午後五時三十分、粥一椀と、鴨肉、甘鯛汁を喫す。六時四十分、戸野氏來診、脈膊如常、體溫三十七度五分、八時山中氏來り治療す。夜安眠。

此日來訪者石田彦兵衞氏及び千枝。

二十四日。　七時、起床。例の通り盥嗽禮拜を了へ、八時五分、粥二椀と、豆腐味噌燒を喫し、十一時二十分、粥一椀と、雪滓汁、百合根砂糖煮を喫し、午後一時より安眠。三時五十分、目覺めて、壽司一椀と、豆腐の煮付を喫す。五時、戸野氏來診、脈膊、體溫如常、六時頃より胃痛甚だ起り、嘔氣を催して苦悶交々至る。十時に至り、尙安眠する能はず。

嗚呼、是より後は言ふも、書くも涙のみ。父上が病の床に就かれしより、余は商社の宿直を他に委して、看護することゝせるも、四五日來は病苦殆んと去り、睡眠、飮食共に常に復し、醫師の診する所、脈膊、體溫、更に異狀なきを以て、心稍安く、久し振りに宿直に赴かんとせり。從來余が宿直を告げて出でんとすれば、父上は丁寧に、『今晩は泊り番か、誠に御苦勞さん……何分よろしく……』と勞はらるゝを例とす、然るに此時に限り、炬燵に倚りて『アー……苦しい……』と呻り、余が顏を靜に視つめしのみ、神ならぬ身の何ぞ知らん、是れ今生の暇乞ならんとは。既に商社に至るも、何となく氣遣はしく、屢々裏口より次の間に入りて、蔭ながら看護せり。蓋し去十四日宿直を廢して枕邊に坐り、職務を重んずる父上の精神を激動したるを以てなり。

夜九時頃、餘りに嘔氣を催し、苦惱甚しきを以て、戸野氏を迎へしむ、氏出でゝ在らず、十二時半、漸く來診、脈膊七十八、躰溫更に異狀なし。然れども高齡に加ふるに、連日の病苦と不眠を以てす、萬々一心臟摩痺の症に陷らざるを保すべからずとて、藥品を與へて、一時三十分去る。爾來、煩悶益募り、一睡だもせられず、母上及び照は枕邊に侍り居り、心を込めて介抱を盡せり。五時頃に至り、苦痛稍退き、便通あり。此時余は次の間より襖を一寸ばかり開きて覗き見たるに、父上亦余が方を顧みて熟視せられたり。照は又其精神を刺激せんことを恐れて注意する所ありしかば、余は襖を閉ぢぬ。今にして之を思へば叱責を受けても尙床邊に侍るべかりしに、余の小心なる、一に過去の訓戒に拘泥し、精神の激動を慮りて、終に不可追の遺憾となりしは、返

すがへすも己の愚と、迂を悲しむのみ。其後父上は照に向ひ『忠一郎は泊り番か、夜が明けたら直ぐに呼びに遣れ、』と、時間の經過を問ふて余が來るを待ち居らるゝが加し、是れ余が溫言を聞きたる最後なりき。六時三十分、一先づ商社に歸り、要を辨じて、八時歸らんとて出づれば、僕榮次郎は馳せて父上の危篤を傳へんとする時なりき。余驚駭室に入り、床前に座すれば、父上は靜かに炬燵に倚り余が來るを見、喜ばしき顏付にて大息を漏すこと二回、眠るが如くして瞑せらる。乾坤寂寞、人生の事休む矣。余と、照は母上に從て枕邊に坐し、慘然一語を發せず、涙痕の襟に滿つるあるのみ。時に二十五日の午前八時、父上の齡は正に九十有二。

跋

孜孜而求生活猶不知生活之本義營營而蓄貨財却不解貨財之効用是凡俗庸人之常態也其陋愚不寧堪憐哉維新以降我邦文物制度一模倣于歐米蒐精拔粹面目一變不復存昔日之觀物質的進步之著大其或距歐米先進國不甚遠焉雖然至人生之理想與致富之精神尙懸隔猶較大矣若夫毅然守一定之主義貯財利用亦基高遠之識見者非超然傑出於世俗之士則不能也如故藤原源作翁眞其人也哉翁成長於幕末

鎖國之際雖非有素養之學識抱文明之思想刻苦經營終致鉅萬之富積而不吝用而不苟聚散自善適理法非凡庸之輩所企及也加之自奉儉素樸實九十有餘年如一日常誡子孫以勤儉處世之道諄諄訓誨靡一不中肯綮焉蓋不由天資英邁達觀百代之後深察人生之大義有豁然所悟安能如此哉嗚呼至誠勵行以身示模範矯正近世人士之弱行如翁者可謂其功德偉大也矣嗣子忠一郎君亦資性高潔享先人之遺產能守遺訓事死如事生人皆稱之頌者寄贈巨資於早

稻田大學及京都大學以充育英之資蓋欲使貧家子弟空擁有爲之材不能學者達其志也且翁生前所愛玩之書畫之珍什器之寶不甚尠可苟供斯道之參考者擧寄付之於博物館以益于公共亦繼翁立志也比諸彼世間滔滔先人歿後柩肉未冷而早既懶惰放肆蕩盡遺產者豈啻霄壤之差而已乎哉頃者翁之舊友橋本君著一書記其性行逸事間交以論評題曰藤原源作翁傳來徵余一言把閲之記事着實論評精覈便讀者髣髴得窺人生之大義與理財之要訣益于世教不

鮮少也余素追慕翁之高風今見此著如宛然接其人之謦欬欣喜不能措卒然附記數言于卷尾云爾

明治三十四年辛丑八月

平田讓衞

勝海舟は幕府の財政難を極め戰亂なきも二十年內に自ら倒るべかりしを曰ひしが實に其の言のごとく幕府の諸侯と衰運に就きしや既に久しく疆外の刺戟なき限り或は幸に存續し得んも一旦之れ有る則ち岌々乎殆きこと必するに足り此を救ふの尋常の道を以てすべからず謂ゆる藥瞑眩せずんば厥の疾瘳へず必ずや非常の人を以て非常の事を行はざるを得ざるの勢にて八代將軍の之を試みしに次て松平越中水野越前の之を敢てせ

しあるが特に越前資性最も剛猛時運の容易ならざるを慨し嚴霜烈日一毫も假さず能ふだけ速に天下を奢侈柔懦より起し勤儉尙武に向はしめんことを期し万石以上以下共奢り箇間敷儀無之衣服飮食之儀は勿論都て無益之費を省き武備鍛錬之手當專一に可被心掛と令し御武事に付候儀は假令存外之散財有之候共銘々覺悟之儀に付別段相違候品も無之と斷はり置き右なるを矯むるに先づ左ならしむるの已む可らざるより令に繼ぐに

令を以てし吏治火を救ひ沸を揚ぐるが若きを厭ふ莫く治忽盛衰を一身に擔ひしかど人衆くして世に解せられず空しく怨嗟囂々の中に葬られ而して幕府と諸侯と過を改めざるの罰として皆な齊しく傾覆し封建は爰に一空に歸せしが爰に一空に歸せしと雖も糜爛せる國家を健全に復せしめんとせる大膽なる手術は全く効なくして終るべくもあらず之と志を同くして明治の世に伸ぶるを得し藤原源作といふの在るある亦た較ゝ注意

を値すべき事に屬す斯の翁は夙に木綿を以て絹布に代へんとし越前の絹布を禁ずるに方り依りて大に業を擴め已に富み已に餘ありて猶ほ愈ゝ益ゝ勤倹を事とし兒の人力車に乘るをさへ戒め鬼忠とまで呼ばれて顧みず而して獨り敎育事業に寄附するを樂み遺言して更に多く寄附せしめんとせしは越前の萬事無益の費を省き唯だ武事にのみ存外の散財をもせよとの意に合へりとすべく諸侯に越前ありしが如く町人に源作あり顯官

として驕奢を警責せる越前ありしが如く富商として驕奢を警責せる源作ありとし極端にて極端を控制し宜しきに歸せしめんとせしを以て越前を稱揚すべくんば併はせて翁をも稱揚せざる能はず越前は嘉永四年を以て世を去り翁の昨年歿したるの其の五十年忌に相當せるは固より偶然なりと雖も抑ゝ又た奇に計へざるべけんや

明治三十四年八月

三宅雄二郎

跋

京都の人藤原忠一郎氏嘗て吾東京專門學校に來り學ぶ予に於て舊識たり頃者書を寄せて曰く知人某先人の小傳を編む願くば一言を題せよと予嘗て翁の名を聞き關西其人あるを知るや久し今此傳に依て更に出處行藏を審にせり夫れ翁は身を窮苦の餘に起し萬難を排して隻手巨萬の富を博し所謂藤原商社なるものをして繁昌を京都に稱へしむ唯此一事亦以て異なりとするに足る況や具さ

に其爲人を觀るに儉素自ら持し精勵己に克ち浮華驕奢を視るを蛇蝎の如く一生を通じて唯堅實を旨とし格謹人に超ゆるものあるに於てをや世一代にして巨萬を攫む者固より其人に乏からず而も其手段往々正道を逸し士人をして顰蹙せしめざるもの稀なり投機に依らず贈遺結托に依らず唯堅實の意志と勤勉の行とを以て之を得たる翁の如きは洵に斯界の珍とすべきのみならず亦以て後進子弟の範とするに足るものあり今や我國

の實業は商たると工たるとを問はず國人の奮勵を須つもの頗る多きにも拘らず一代の風氣浮華驕奢に流れ克己精勵堅實以て事に從ふ者寡し是れ今日の一大時弊にして特に翁の如き人を要する所以に非ずや而して今や既に其人亡しと雖も此書能く其爲人を描て遺憾なきに庶幾し乃ち之を世に公にす豈多少世を益するなしとせむや仍て氏と謀り之を吾校出版部に附して梓に上し且つ所感を述べて跋と爲すと爾り

四

鳩山和夫

跋

嗚呼藤原翁の生前動もすれば『鬼忠』と呼びたる人人も其死後に陰徳の漸く知れ渡り遺訓が美擧となりて世に現はるゝの今日に及びては定めて『佛忠』とも呼ぶなるべし夫れ翁より言へば鬼もなく佛もなく唯一個の源作と云へる本尊あるのみなるに世人の眼には鬼ともみゑ佛ともみゆ毀譽の恃むべからざること此の如し宜なるかな翁が千秋論定るの日を待たれけるや而して此書こそ實に定論

を下すべき資料なりと謂ふを得べし

蓋し翁は家運の衰へたるを挽回して巨萬の富を致せし外其生涯は極めて平調なるが故に面白からずと曰ふ者もあらん然れども其平調なる處即ち翁の翁たる所以にして終始一貫力を家業に用ゐたるが爲なり夫れ志一ならざれば立つ所なく業專ならざれば成る所なし而して翁は一志專業勤を以て之を行ひ儉を以て之を守り歳月を累ねて今日を致す是れ豈に所謂正法に不思議なきものに非

ずや彼の投機の事業と僥倖の成功とに在りては波瀾變化の喜ぶべきものあれども成上りの身上が朝に榮えて夕に衰ゆる有様を觀れば寧ろ平調の安全なるに若かず然らば則ち商人の模範となすべき所子孫の服膺すべき所反て之を面白からざる中に求むべきのみ

何事も理の極處に至りては則ち一なり余や翁と志を異にし業を同ふせずと雖も尚ほ翁の事跡に因りて感發する所なしとせず蓋し

翁が閲歴の久しくして自得の深き其言ふ所自ら眞理に合し哲學の理想なくして超凡の意興あり文字の素養なくして老成の見解あり是れ所謂天籟なるものにして反りて學者の空言に勝るを覺ゆ三人行へば必ず吾師あり況や翁の如き人をや豈に惟商人の模範なるのみならん

我が東京專門學校が早稻田大學の設備に着手するや翁の令嗣は遺訓に遵ひて巨額の金を寄贈せられたり余や教職の末に列するこ

と殆と十年校の利害は猶ほ一家の休感に異らず則ち余自ら翁の惠を受ると何ぞ異らん是に於てか本書の首に一言を題するも未だ全く因縁なしと謂ふべからず故に高田學監の旨を承けて呶々を費すこと爾り知らず翁以て佛頭の糞となすか抑も亦佛前の花となすか

松平康國

跋

藤原源作翁は京都實業界の奇傑なり翁初め近江の國蒲生郡に生れ弱冠にして出でゝ京都藤原氏の嗣子となり偶ゝ其家道の將さに衰へむとするに際し憤を發して之が挽回の策を講じ『鏈忠』の名漸く遠邇に聞こへ晩年遂に藤原商會の設立を見るに至る星霜實に六十餘年終始常に勤儉を以て一貫す其意志の鞏固にして操行の確實なる世間多く比倫を見ざる所なり蓋し京都の地たる山明水媚區

寰既に晝圖に似たるものあり民衆も亦た都雅秀麗を以て特色となし春の晨秋の夕綺羅聯翩として相徵逐し嵐峽花發けば珊鞭公子の馬を驅り鴨涯月明かなれば羽觴美人の舟に飛ぶ乃ち豪奢華麗は彼等が平生視て以て毫も怪まざる所其間にありて獨り自ら異にし平生惡衣にして粗食し性酒を嗜まざるにあらざるも生來二回の外嘗て杯を手にしたることなく齢八旬に達し親戚故舊の特に勸告する所あるに及び始めて絹衣を用ゐたる翁

の如き者は實に百に一を取り千に一を取るも尙ほ恐らく得易からざる所ならむ宜べなる哉其空拳を揮ふて富鉅萬を致たし遂に故櫻洲山人中井弘氏をして其廬に式し以て貨殖の秘訣を問はしむるに至りたるや翁や必らずしも治國平天下の功業ありしにあらず必らずしも撥亂反正の手腕ありしにあらず然れども若し滔々たる時流の外に卓立し飽くまで自家の見地を執り遂に大に成功する所ありし者を以て一世の奇傑たるに値ひす

とすれば翁の如き者も亦た優に其一人なるべし翁が生涯の事業決して尋常人の爲し能ふ所にあらざるなり

而かも翁が尋常人に異る所以は別に大に存するものあり蓋し積で散せざれば遂に卑吝の譏を免れざるべく徒らに阿睹物を蓄積して畢生の樂となし毫も之を利用する所以を計らざれば其世に稗益なき一に夫の財を糜し一身の驕奢に汲々たる者と擇ばざるなり世の素封家を推稱するもの豈にそれ此くの

如きに取らむや大に積むは大に散ぜざるべからず而して之を散ずるや亦た最も其法を擇ばざるべからず既に之を散じ又た散ずるに其法を得是に於てか始めて素封家の素封家たる所以のものゝ見はる思ふに翁が六十餘年間細心翼々として一に蓄積の事に努め殆んど金錢を以て命となすの觀ありしに關せず故舊に厚くして其窮困を救ひ公共心に富みて土工其他の事業に資を擲ち更らに卒するに臨み家に遺言して京都大學及び早稻

田大學の基金として數萬の鉅金を醵出せしめたるが如き其功と德と實に偉大なりと謂ふべし此功と德とありて是を以て平生齷齪として銖錙の微を爭ひ遂に富鉅萬を重ぬるに至りたるも曾に翁の德を累さゞるのみならず又た寔に人をして其素志のある所を忖度し翁の衷心毫も疚ましき所あらざりしを認識せざるべからざらしむ昔し晝僧月僊なる者あり畫を乞ふ者ある毎に必らず先づ潤筆の多少を論じ潤筆にして苟も多ければ輙

ち直ちに筆を揮ひ遂に一娼婦の爲めに其禪に畫き時人以て陋となせり然るに後ち偶ゝ歳の餓ゆるに際し彼は悉く其獲たる所のものを以て窮民を救ひ遂に大に景仰慕悅せられたりと一浮屠の事跡固より以て翁の閱歷に比すべくもあらずと雖も其人言に依りて左右せらるゝ所なく毅然として遂に初志を貫徹せしめたるに至りては或は以て相近似すと爲すべきか要するに翁を指ざして守錢奴と嘲り『鬼忠』と誣ひたる徒輩は翁の爲めに

實に喬樹を撼かす蜉蝣の類のみ豈に復た翁を損益輕重するに足らむや

抑も余更らに感ずる所のものあり往時賴山陽京都の名産羽二重の說を作り以て猪飼敬所の七十を壽し『京都の人美なり盛なり錦の如き者あり綺と縠との如き者あり而かも此帛に媿ひて愧づるなき者に至りては誰ぞや吾が聞く所を以てすればそれ猪飼翁か』と言へり方今猪飼翁の如き者多く得て求むべきにあらず乃ち源作翁が滔々たる時流に挺ん

で能く勤儉を以て一世を貫き身米字の壽に達するまで嘗て絹衣を用ゐたることなきもの寧ろ欽して而して敬すべきにあらずや山陽又た記して曰く『吾は鄙人なり鄙に學び而して京に居る猶ほ河內木綿の如きか其粗にして朴なる固より王公の服に供すべからざるも或は以て民の用に充つるに足らむ而して其壽も亦た冀ふべきか』と源作翁は實に近江の國蒲生郡の產にして入りて京都藤原氏の家を繼ぎ木綿問屋を創じめて遂に大に成功

したる者其民の用を濟したるもの果して幾何ぞや彼は自ら奉ずるを極めて薄く衣食住の三者皆な粗にして朴なりしも故舊を救ひ公共事業に盡し特に兩大學の基金を納れ以て育英の事業に貢献したる功と徳と竟に磨すべからざるものあるなり思ふに翁の名は京都早稲田兩大學と共に殆んご無窮に傳はり天下の青衿將來是等兩大學に學ぶ者永く其澤に浴せば翁は死するの日も猶ほ生くるの日の如きものあらむかな今回傳成る余既

に早稻田大學企劃者の一人として翁の好意を深謝するのみならず翁の令嗣忠一郎氏とも亦た東京專門學校校友として相識れるが故に遂に所感を其後に書すと云爾

明治三十四年八月

高田早苗



呉月溪筆青綠山水圖（絹本）



大雅堂霞樵筆麻姑仙壇ノ圖

（絹本着色）



琵琶行圖　貫名菘翁書　中西耕石畫　（絹本着色）



中西耕石筆金碧青緑蜀山道圖（絹本）



大雅堂霞樵筆觀音ノ圖（紙本墨畫）



蕪葭堂筆桃源ノ圖（紙本淡彩）



貫名菘翁筆老松ノ圖（絹本墨畫）



宋明之筆櫚庭之圖（紙本淡彩）



顏輝筆南極壽星ノ圖 （絹本着色）

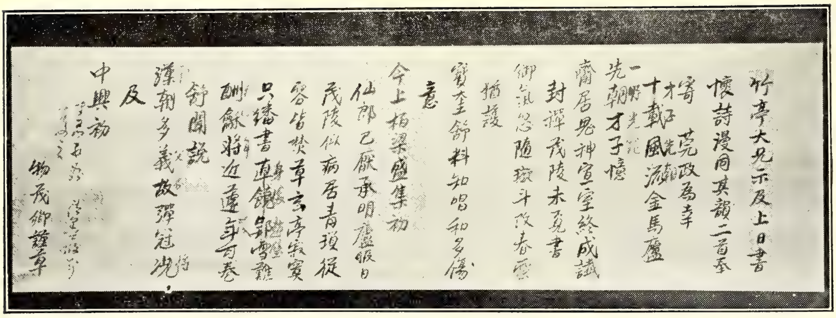


駒井源琦筆唐美人ノ圖（紙本着色）

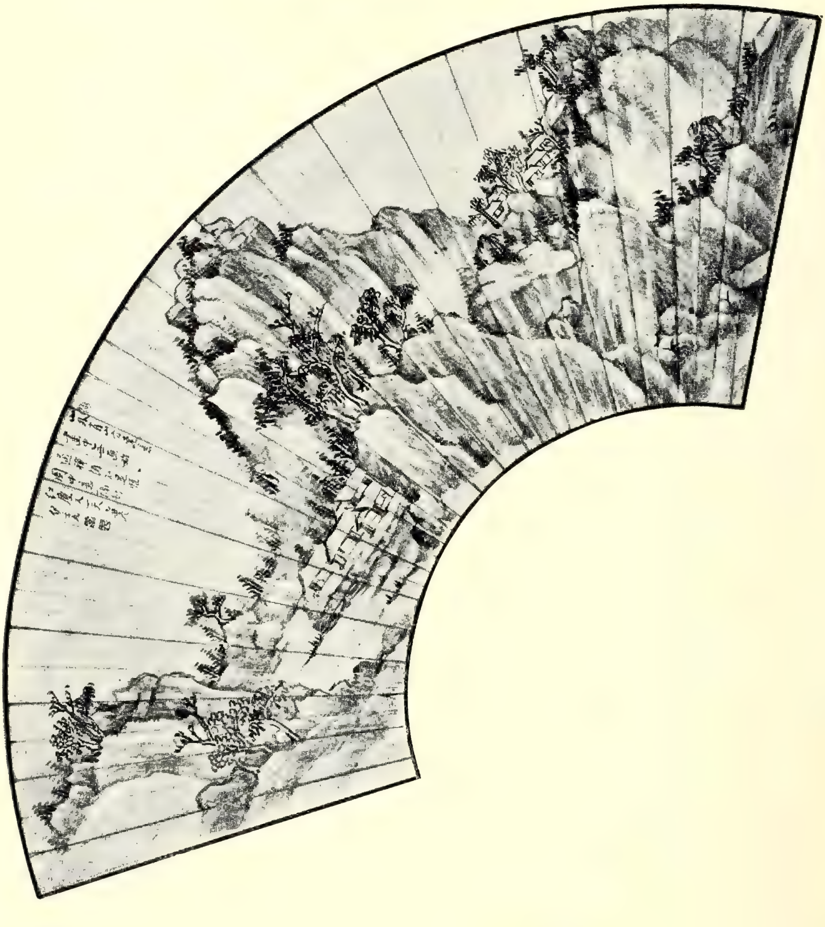


彭百川筆山水ノ圖（紙本淡彩）

萩生徂徠筆蹟



伊孚九筆扇面山水



攀紅五彩雲龍穿海濤火入一雙（青木木米作）





饗餮紋火（泰藏六作）　　古銅鼎

古銅香爐（鼎式四尺）　古銅鑊（秦藏六作）





萬曆摸樣食籠長寛作

唐製青貝欄干附ノ卓



小川一眞製版印刷

明治三十四年十月十日印刷
明治三十四年十月十四日發行

非賣品

編輯者　橋本正志

發行者　高田俊雄
東京市牛込區赤城下町廿七番地

印刷者　小久江成一
東京市牛込區矢來町四番地

印刷所　秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地